翻訳

二胡情縁(7)

――二胡少年の夢――

趙　寒陽 著／朱　新建・王　紅梅 訳

第七楽章　新米団員

1970年3月2日に、私は常州市文工団[1)]の団員合格通知書・戸籍と食糧・油の関係書類を本部まで持っていき、受付登録をすませた。私と同時に受かった学生は他に呂雅白、高雅峰、劉亜琴、王艶麗、尚志芬、王洪海など十人ほどいた。そのうち、王洪海は声楽組で、私は器楽組、残りの女子八人は全員舞踏組の所属だった。

当時の本部は石子街にあった。「街」と称されるが、実際は小さな通りだった。本部の建物は古びているように見えるが、昔は大金持ちの豪邸だったようだ。その正門の前に高い敷居が敷かれている。正門を通り抜けたら守衛室があり、門番は蒲娟娟さんといい、子供もおらず、家も仕事も何もない独りぼっちのお婆さんだった。部屋にベッドを一つ置いたらもうそこが家になったわけだ。中に進むとロビーがあった。普段は舞踏組の稽古場となっている。裏に食堂があり、両側は我々の宿舎だった。私は食堂の右側の宿舎に配属された。暗くてじめじめしている部屋にはすでに3人住んでおり、私のために部屋の真ん中にベッドを追加したので、部屋がさらに狭く感じるようになった。そのためか新入団員の私は歓迎されるどころか、先輩達に全く受け入れられないようだったが、本部からの配属命令なので、彼らは毎日私を白い目で見るほかなかった。こちらの「先輩」3人と隣の「先輩」3人は全員40代で、いずれも元上海劇団と滑稽劇団の器楽奏者で、ほとんど実家は常州市内ではなかった。普段はここで家のように寝起きし、祝祭日にしか家に帰れなかった。そうでないと、じめじめして混み合っている寮に、誰が喜んで毎日泊まるだろう。まあしかし彼らは劇団専属のプロの演奏者で、これで生計を立てているわけだからきっと腕が立つだろうと私はいつも考えていた。いつか彼らに演奏技

術を教えてもらいたいと、ずっと尊敬の念を抱いて接していた。毎日食堂にお湯を汲みに行く時は必ず片手に魔法瓶2個を持っていき、一回で皆の分を汲んでくる。それに、部屋の掃除や机拭きやゴミ捨てまでも私一人でこなしていた。ところで「先輩旦那」[2)]たちは、劇団にて数十年も明け暮れしてきたので、「新入弟子」[3)]が「親方」[4)]に三年奉仕するというのは劇団のルールだと考え、私の「勤勉さ」を当たり前のように見做している。魔法瓶が空いたら、「趙寒陽！お湯を汲んできてくれ」とあしらわれたり、夜食や飲み食いの後、ピーナッツの殻やニワトリの骨を地面に散らかしては、「趙寒陽、明日、机を拭いて、地面も綺麗に掃除してくれよ」と指図したりしていた。

元々新米団員の私は、若い上、力もあるので、体を動かしたりする力仕事は大して苦にならない。一番堪えがたいことは、これらの「先輩」の体内時計は私のとは真逆で、私が二胡を練習する時に彼らは熟睡しており、私の寝る時間に彼らはちょうど興奮する時分だったので、二胡練習はいつも彼らに強く反対される羽目になってしまう。

最初は劇団のルールもよく分からなかったので、今までどおりの習慣で生活していた。朝六時半には必ず目が覚める。しかし周りの「先輩方」はまだぐっすりと眠っている。私は一人でこっそりと起床し、洗顔や歯磨きを済ませると外に出る。体操をしたりして体を動かす。そこへ、同期の皆も起床して集まってくる。舞踏組の女子達は足を伸ばしたり立ち回りの稽古をしたりする。七時半になると、皆続々と朝ご飯を食べに食堂へと向かう。我々一年目の新米の待遇は、食事と宿泊は無料提供のほか、毎月4円の安月給なので食事はただである。8時になると、私の二胡の音が決まって食堂で響き始める。まずは長弓から始まり、音階、それから味気ない練習曲だ。一時間以内では心地よい音楽は一切聞こえないはずだ。一日目はさすがに文句を言う人はいなかったが、次の日から我慢できない人が現れた。誰かが大声で怒鳴った。

「いい加減にもう弾くな！　俺はまだ寝てるんだぞ！」

その一喝にびっくりして、もう練習できなかった。寮に戻って枕元の目覚まし時計を見ると、すでに午前8時も回っていた。まだ寝ている人がいるなら、後で練習すればいいだろう。それから30分以上待ち、すぐ9時になるだろうからそろそろ練習しても大丈夫だと思い、先の練習曲を続けて練習しはじめた。弓を2、3回弾いたら、また怒鳴られた。

「いい加減にしろといっただろう！　お前はなんでまだ弾いてんだ！」

私はドキッとして、怖くて練習をやめた。入団したばかりだった私は、先輩たちの機嫌を損ねてはならないと忖度した。昨夜は遅寝だったのかもしれない。（昨晩はいつ寝たかも分からないが）今日は先輩たちが起きられないなら、明日練習すればいいだろう。

午前9時からは、我々生徒達の稽古の時間になる。稽古は元々舞踏組の仕事で、陳麗華監督が生徒達を率いて舞踏の基本訓練をするのだった。私と王洪海君は舞踏組のメンバーではない

のに、本当に稽古に参加しなくてはいけないのか。本部の指導者達はそれについてわざわざ会議で打ち合わせたらしい。結果はやはり、生徒全員が舞踏の稽古に参加しなければならないという結論に至った。なぜかというと、当時の文工団内ではこういう固定観念が流行っていた。芸術的才能から見ると、舞踏家は最高で、次いでは声楽家、楽器奏者は才能が最低レベルだった。というわけで、本部の幹部はいつも新米団員にまず舞踏を稽古させる。舞踏ができない人は一歩退いて歌を練習させることに。歌もできない人はまたワンランク下がって楽器演奏をさせるのだ。これは後にこんな冗談話にされ、団員達の間で密かに広まっていった。「団長はどうやって選出されるか知ってるかい？　元々舞踏家を目指す人が、腰も曲げられないし足も上げられないから歌に転向。しばらく声楽を習ってみるが、高音は出せないし、低音もできないからまた楽器奏者に転じる。楽器はしばらく練習してみるが、速く弾けないしゆっくりも弾けないから指揮者を務めた。そうなれば、自分で演奏する必要もなくなり、ただ他人の演奏を指揮するだけで良い。しかし、指揮も出だしが揃わないうえ締めくくることもできないからまた作曲に転向。今度は好きな音楽を紙に書けば良い。他人の理解に任せて、演奏者が好きなように演奏するだけなのにしばらくすると、たまに鼻歌が浮かぶがメロディーはどうやら紙に書けないからまた転向を余儀なくされた。今や演劇団内では他にできる仕事はもはやない。上はその状況を考慮し、どうすればいいのかな、じゃ、団長を務めさせるが良いかも！　と案じる。口を動かすだけで他人にやらせば良いからだ。万が一団長の職も務まらなければ、また局長に昇進させればいいだろう」と（当時の社会主義の制度では就職した場合解雇できない）。

舞踏稽古はまずストレッチからだ。第一歩は足を手すりに上げ、頭を足の指まで前へ前へと押さえていく。第二歩は両足の開脚練習。床に座り、2人がかりで両足を左右に、最終的に直線になるように強引に伸ばしていく。この2種類のストレッチだけで、私と王洪海にとっては命がけだった。「老虎凳」[5]の拷問じゃないか。女子はさすがに体が柔らかく、ストレッチをしながら談笑しているが、男子の王君と私の場合は全くだめで、涙が出るほど激痛に耐えているが、もう王君は「痛い、痛い」の連発で、皆の笑いを誘っていた。

こうして一週間の稽古が過ぎ、陳麗華監督も男子の2名が「向いてない」と判断し、本部幹部に報告した。これを幸いに、団長から舞踏稽古を免除され、それぞれ本来の専門に戻った。おかげで毎日午前9時以降は私の法定練習時間になった。うまくなくても、辞めてくれとクレームをつけに来る人はいなくなった。

毎日午後2時から5時までは政治勉強の時間だった。各組が集まり、それぞれ、『毛選』（毛沢東選集の略）を勉強したり、新聞を読んだり、時事について討論したりしていた。流れで言えば、まず一人が先に朗読する。その朗読途中、タバコを吸ったり、お茶を飲んだり、居眠りしたりする人が続出。討論の場合になると、最初はまだ話題に沿って話すが、10分も経てば、

もう脱線して、雑談になった。毎日がその繰り返しなので、皆がそれに慣れてしまい、だんだん気にする人もいなくなった。

晩ご飯を済ませてから、通勤の人は続々と家に帰っていくが、本部に宿泊する人は、トランプを楽しむなり、お茶を飲みながら雑談するなりで暇つぶしをするのが普通だった。私は相変わらず時間を切り詰めて二胡の練習に集中していた。こんなに頑張って専門に力を入れる私は、上に褒められるだろうと思っていたら、まさか大変なことが先に自分を待っていたとは思いもよらなかった。

私たちの器楽組には、屠須銘（仮名）という名前の先輩リーダーがいた。皆に陰で「図有虚名」（名だけ）と呼ばれていた。その方は、専門ではかなりの腕前で、ある有名な師匠のお気に入りの弟子だと伝えられており、今や文工団の中では共産主義青年団支部書記に抜擢されている。我々のような新米団員は思想教育上、皆彼の管轄下に置かれることになっていた。私は朝から晩までひたすら二胡を練習することで、他人から顰蹙を買っていたようだ。「趙寒陽は有名人になりたがっている。『白専路線（専門重視）』[6]を突っ走る傾向がある」と屠に言いふらす人がいた。あろうことに、この屠先輩は人をいじめることがすきな人のようで、報告を受けると、即座に思想闘争の好例として自分の功績の見せ所だと、団員達を集めて会議を行った。会議で、階級闘争の最新動向に注目し、「白専路線」の思想に走った者に断固闘うよう団員達に呼びかけた。幸いなことに、この時はまだ名指しで私を批判していなかった。

実を言うと、私はこの屠先生のことを「兄師匠」と呼ぶべきだったのだ。なぜかというと、その当時、常州にはイケメンで文才抜群の4人の青年がいた。その4人はよく集まって碁を打ったり、音楽談義したり時事について討論を交わしたりして、「常州四才子」と呼ばれていた。恩師の劉逸安先生とこの屠須銘氏はその中の2人だった。私は劉逸安氏の弟子である以上、四才子のなかでは三番手の屠須銘氏も私のことを少しは面倒をみるべきではないかと思った。ところが、彼は自分の政務実績を出すために、そして今後の昇進のための点数稼ぎに懸命で、友達の弟子に世話を焼くなんて考えてもいなかった。

ある日、屠氏はわざわざ劉逸安先生のところに、「うちの団で新米団員の趙寒陽は、君の弟子だろう」と聞きに行った。劉先生は、趙寒陽が僕の学生だと知って、わざわざ挨拶に来たんだ、屠さんはいいやつだなと思い、笑顔で「はいはい、どうぞよろしく。」と答えた。ところがそこへ、この屠須銘氏は厳しく言い放った。「趙寒陽は、二胡の二本の弦だけ取り、階級闘争の一本弦を切り捨てたやつだ。『白専路線』まっしぐらだ。今批判の対象になっている！
そして、その罪の根源はどこにあるのか、背後に誰がいるのか、摘発しなくてはならん！
知ってるぞ！　彼の背後には君がいる！　気をつけろよ。ただちに反省しないと、プロレタリアは君に制裁を加えるぞ！」これを聞いてさすがの劉先生も顔色が真っ青になって怒り、彼の

鼻先を指さして言った。「屠須銘！　君はなんてやつだ。趙寒陽は革命のために一生懸命練習をしていると聞いているが、どこが悪いんだ！　君たちの文工団は低いレベルのままで、どうやって人民に奉仕できるのか。長年の仲間なのに、趙寒陽にはたとえ何か間違いがあっても助けてやるべきだろう。それどころか彼は何のミスも犯していないじゃないか。趙寒陽は入団する前から私の教え子だったんだよ。今私は名誉も利益もかえりみず、ボランティアで君たちの後継者を育てているんじゃないか。なのに背後だのプロレタリア制裁だの、どういう意味だ!?犬の口から象牙をはくまい！　できるもんならやってみろよ！」屠須銘はなにも返す言葉なく、「じゃ、今に見ていろ、今に見ていろよ」と帰っていった。

それから、劉逸安と屠須銘はきっぱり縁を切った。私のためにそこまでして、堂々たる常州四才子の仲が割れ、どれだけの花鳥風月、琴棋書画の風流がなくなったことだろう。

事は簡単に終わったわけではない。翌日晩ご飯後、屠須銘は第二回団員大会を催した。我々新米団員10名の他、舞踏監督の陳麗華先生も参加した。屠須銘は固い表情で共産主義青年団を代表して会議の進行役を務め、まず自ら毛沢東主席の語録集を一段落暗誦した。「偉大な毛沢東主席は我々に、どのような状況下に置かれても、階級闘争を忘れてはならぬとお教えになっておられました。」

そう言いながら、彼は主席のしぐさを真似るかのように手を振り回したが、まったく似ていなかった。彼は言い続けた。

「階級闘争はほかでもなく、正に我々の身近にあるのです。今、世の中にはちゃんとした仕事をせずにぶらぶらしているばかりで、次世代の若者を我々と奪い合う人がいるのです。彼らは我々の若い団員に有名人になれ、芸術家になれ、とかいう資産階級の思想を教え込み、生徒たちが『白専路線』に走るように洗脳するのです。皆さん、大胆に意見を発表しなさい。そんな人とは闘争すべきではないでしょうか。」

生徒たちは互いに一目見合ったが、何か言う勇気のある人は誰もいなかった。屠須銘は続けて大声で命じた。

「趙寒陽、お前、立て！」

私はびくっとして即座に立ち上がった。頭を下げたままで、誰とも目を合わせることができなかった。当時の政治的ホワイトテロを背景に、私は心より怖がっていた。ただただ屠須銘の次のような話を黙々と聞く他何もできなかった。「あなたは今やもうプロレタリア戦士になっているのに、なんでぶらぶらしていてまともな仕事にも就いていない人に二胡を学ぶのか。あの人の出自は知っているのか？　彼のことについて何がわかると言うんだ。我々の団内では優秀な先生がたくさんいるだろう。どなたでもお前に二胡を指導できるだろう。階級闘争一直線よりも二胡の二本の弦が大事だなんていうやり方について、きちんと反省しなさい。名ばかり

の芸術家になりたがるような資産階級的な考え方を頭から取り除きなさい。我々が求めているのは心を真っ赤にするプロレタリア革命戦士であって、白専路線を突っ走る芸術トップを目指す者などでは決してありません。これからはきちんと自分の認識を深く反省しなさい。」

そう言いながら、また顔を他の生徒に向けてこう話した。「こうしましょうか。落ちこぼれそうな同志を救うために、本日より学習援助チームを創設しましょう。それでは、このチームの責任者を尚志芬さんに任せることにしましょう。解散！」

皆はだんだんと去ってゆき、私一人だけその場に留まり、動こうともしなかった。ただ涙だけがぽろぽろと落ちていく。悔しい、怖い、憤る、唖然……等々複雑な気持ちが心の中でこもごも入り交じり、絡み合っている麻のようで、切っても切れないで、整理すればするほど乱れてしまう。そこにある人がやってくるまで、どれだけじっと立っていたかよく分からなかった。「趙寒陽、大丈夫よ。自分の物事の考え方さえ正せば、君は相変わらず良い同志よ。さぁこのまま立っていないで、帰って休みましょう。」見上げると、舞踏監督の陳麗華先生だった。あたかも家族が現れたかのように、「陳先生、私は有名人になろうとも芸術家になろうとも何も考えていません。白専路線も走るつもりはありません。ただ二胡をもっと上手に弾きたいだけです。これも、人民にもっと奉仕するためではありませんか。」と私はむせび泣きながらそう答えた。「今日はもうここまでにしましょう。君も帰ったらよくよく考えてごらんなさい。今自分の思想の根源に何があるかよくよく掘り下げてみなさい。早く帰って休みましょうね。」と陳監督は優しく慰めてくれた。

そこから、毎晩七時から八時半までは、私のための学習援助チームの会議時間となった。尚志芬が責任者を務め、まず毛沢東主席の著作を勉強するのだった。「例の三篇」の「人民のために奉仕する」、「白求恩を記念する」、「山を移す愚公」から、「湖南省農民運動についての考察報告」、「党内の間違った思想の修正について」、「青年運動の方向」、「リベラリズムに反対する」、さらには『実践論』、『矛盾論』などの哲学著作まで、一通り学ばされた。会議の最後は、皆が私に対する批判のコメントを発表する時間だった。「有名芸術家になりたがる考え方」や「白専路線を突っ走る」ブルジョア思想を批判するのが目的だった。ほとんどの発言は「我々が批判しているのは趙寒陽その人ではなく、ブル思想なのだ。」あるいは「お互いに励まし合い、ブル思想の侵入を共に防ぎ止めよう。」と言及した。そこに、私はクラスメート達の受け身的にやらざるを得ないような気持ちと皆からの深い友情をしみじみと感じた。会議の雰囲気と皆の発言を聞くと、これは敵と味方の矛盾でなく、人民内部の矛盾のように捉えられ、何とか安堵を感じた。それで、私も毛沢東主席の著作をまじめに勉強し、皆からの発言に耳を澄ませてよく聞き、まじめにノートを取っていた。十数ページの思想報告も書いて提出した。

援助学習が始まって半月も経ち、ある日の午後に本部の全体会議が開催された。市文化局の

指導者も全員参加だった。会議中私は全面的な反省発言をさせてもらった。「私は、毛沢東思想については勉強不足で、階級闘争の観念も弱く、思想の方が単純すぎました。人民奉仕のために二胡の演奏レベル向上云々ばかり考えていました。主体的にブル思想の侵入を防ぎ得ることができずにいて、もう少しで白専路線を走るところでした。私を救ったのは共産党と人民大衆です。とりわけここで屠須銘先生に感謝したいと思います。先生が折りよくこの新たな階級闘争の傾向を見つけ、私の背中を叩いて呼び覚ましてくださいました。同時に、学習援助チームの皆が私の間違った考えに対して批判して教育してくれたことを感謝致します。そのおかげで更に自分が直面している危険な境遇に気づくことができました。今後は毛沢東主席のご著書をもっと丹念に読んで勉強していきたいと思っています。何事に関しても階級闘争を旨にし、紅且つ専のプロレタリア革命文芸戦士を目指していきたいです。」

そう言いながら、屠須銘と学習援助チームの皆にお辞儀をし、改めて感謝の意を表した。涙まみれになって死を以て謝罪するほどではなかったが、確かに自分の考えの深いところまで掘り下げて反省するつもりだった。その後尚志芬は学習援助チームを代表し、十数日間の学習を通して皆が思想レベルにおいては大いに進歩することができ、階級闘争の複雑性と深刻性もはっきりと認識することができた云々と発言した。同時にこれからは学習援助チームを毛沢東主席の著作学習チームに改名し、永遠に勉強し続けていくことを公言した。皆の拍手の中で屠須銘は共産主義青年団を代表して発言した。彼はどのようにすれば鋭い目で階級闘争の新たな動きを見出せるか、どのようにすれば旺盛なプロレタリア感情で味方の同志を救い得るかについて自分の経験を分かち合った。最後に、市文化局の指導者は今回の「かなり効果的な」援助活動について十分に賛同の意を表し、さらに我々に経験をまとめ、わが市の文化系統にて全面的に普及させるよう呼びかけた。屠須銘氏も優れた政治的な働きで特別に常州市文工団革命委員会のメンバーとして任命された。そうすると、本部の指導権もより一層強化されることであろう。

数日後、市文化局は案の通りに文化系統内全職員大会を催し、我が「学習援助チーム」が会議で経験紹介をさせられた。もちろん、私は中で依然として救われた白専の典型として役を演じさせられ、もう一度文化系統内全職員の前で思想上の反省を深くさせられた。とことん「顔」を周知され、「名」も隅々まで覚えられたのではないか。その後本部は演出の任務を引き受けることがなければ、私に対する「援助作戦」はまだまだ続けていくだろう。屠須銘もそのことで大変な出世を遂げ、したり顔をして我々生徒に対してもっと厳しく取り扱うようになった。その当時、青年は皆思想上の進歩を求め、共産主義青年団に入ることが政治的に第二の人生を歩むこととして見受けられた。しかし、屠須銘の贔屓を受けることなしには共産主義青年団に入ることは天に上ることよりも難しくなった。この屠先生は何年も風雲児のように自慢した

後、とうとう風流韻事が伝えられ、調査の上免職処分されてしまい、威光が地に落ちたかのように、未だに解放されない始末となった。

ある哲学者はこう言ったことがある。「神様が人を育成する方法にはいろいろあるが、その一つは失敗させ、苦しみを経験させることで汝が強くなり、知恵もそれで増していく。また、神様が人を壊滅させる方法にもいろいろあるが、その一つは成金の出世を与え、一夜にして大金持ちにさせること。それで汝は強欲になり、思い上がって調子づくことになる。」あれからかなり時間が経ってからある本でこの文を目にした時、それまでずっと胸に残っていた不平不満が瞬時に消えていった思いがした。屠須銘に感謝する念まで抱いた。神様がある人の壊滅を代価に私を育成したのではなかっただろうか。

常州市文工団が成立して初めて稽古に臨んだのは山東省歌舞団から習ってきた『農奴戟』（奴隷のホコ）という革命歌舞劇だった。当の演目は1927年に、江西省の小さな山村で共産党員の張という鍛冶職人が湖南省から革命の火種を受け、「三つの大きな山」に圧迫されている多くの貧雇農を団結させ、極悪の地主と戦い、最後に革命本拠地の井岡山にまで踏み入った物語を描いた。当時のいわゆる革命劇が大体そういうふうな決まった展開のストーリーが多かったが、何しろ文工団はいよいよ本格的に芝居の下稽古を始めることになるので団内全員が興奮気味になっていた。

やっと台本を手に入れた。ガリ版印刷[7)]のパンフレットだった。舞台美術担当チームに鋼板にきれいな字を刻み入れることができる職人さんがいた。彼は何日も徹夜して脚本を全て原紙に刻みこんだ。これは当時では一番流行りの印刷方法だ。薄い原紙の下に専用の鋼板を敷き、鉄製ペンで字を書きこんでいく。それからガリ版で印刷する。きちんと装丁したら一冊の資料になるわけだ。印刷工程はとても大変な上、汚いこともあり、本部はこの仕事をわれわれ器楽担当に回した。

その日の夕飯後、徐正栄隊長が我々を率いて「印刷工場」を始めた。稽古場にピンポン台を二つ置き、その上にガリ版のコピー機を乗せた。こんな簡易なコピー機を目にしたのは初めてだった。「機器」と言うよりはむしろ木造箱と称した方がいいのではないか。開けると網張りの木造の枠とハンドル付のローラーがあった。印刷する時は字が刻み込まれてある原紙を網に貼り、下のクリップに紙を挟んで右手でインクをつけたローラーを持ちながら原紙を下から上へと押していけば、一枚コピーできるという仕組みだった。刻み済みの原紙が持ち込まれてきた。ワンセット分余りで合わせて50枚以上もあろうか。大きな紙束が数セットも運ばれてきた。原紙一枚につき60部も印刷するので、合わせて3000枚余り印刷することになる。これは正に大変な力仕事だ。手に力を入れて押さなければ綺麗に写らない。それをひたすら3000枚

も押していくのは、大の力持ちの張飛にしてもさすがに一人では成し遂げられない仕事だろう。それで我々は交代制でやっていくことにした。ほかの人は紙をセットするなり、インクを補充するなり、紙を折って製本するなりで大忙しだった。

時間はあっという間に十一時を回ったが、原紙はまだ十数枚しか印刷できなかった。私は小さいころから十時すぎてもまだ起きていることはなかったので、真夜中の様子は一切わからなかった。眠くてあくびを連発した私だったが、敢えておしまいの時間を聞く勇気もなかった。皆少しも切り上げるきざしがなさそうなので、我慢するしかなかった。そろそろ時計が12時を回ろうとする時分になり、私はとうとう我慢の限界にきた。こっそりと隣の張昌生氏に聞いた。「張先生、今日は何時まで仕事する予定ですか。」張昌生氏は器楽では中胡を担当する演奏者で、元常州市上海劇団から転勤してきた優しいお爺さんだった。「お前、徹夜なんかしたことがないのか。この仕事は明日の八時まで終わるはずがないさ。これから徹夜戦のことは多いぜ、覚悟しろよ。」そう言いながら手中の仕事は少しも怠らなかった。

私は口を開け舌を出して、何も言えなかった。それではじめて人間は夜になっても寝ないで夜通し仕事ができるものだと分かった。

それから脚本60冊がきっちりと卓球テーブルの隅に積み込まれるまで、我々は本当に翌朝の8時過ぎまで仕事を続けた。見渡すとどこもかしこも廃棄紙が散り乱れ、人々の手は青いインクだらけで、顔も色とりどりになり、鼻の穴さえも白っぽい紙の粉まみれだった。

やがて舞踏組の女子達が起床し、男子たちの鬼みたいな顔を見て皆笑いを堪えきれずにブーッと吹き出した。

「何を笑っているの。我々の辛さを見てごらん。後片付けを手伝ってくださいよ。」リーダーの徐正栄隊長がそう言うと、陳麗華監督も舞踏組の生徒たちを呼んできて、

「皆さん、後で稽古をしますから稽古場を綺麗に掃除しましょうか。」

と呼びかけた。

それから私たちに振り向いて、「ご苦労様。後は私たちに任せて。早く帰ってよく休んでくださいね。」と言ってくれた。

それで、徐正栄と張昌生の二人は印刷済みの脚本を抱えて団長室に復命に行った。私たちは顔を洗って漬け物にお粥のような食べ物で簡単に朝食を済ませた後、早くも睡眠補充に横になった。

石子街にあるこの本部が実に小さ過ぎて演劇活動にはスペースが足りないので、1970年6月に常州市立文工団はとうとう天寧寺の近くにある元上海劇団本部だったところに引っ越した。そこはかなり広い土地にあり、大小60、70室の部屋をもつ回転式の二階建てが建っていた。

元々中国の十大仏教聖地の一つである天寧寺の参詣者ビルで、長年の歴史が誇る木造建築物だった。

新しい本部に引っ越したと同時に、我が器楽もリハーサル室として前よりずいぶん大きな部屋を手に入れたが、総楽譜を手にしてみて初めて、既存の器楽がまったく全体的な要求に答えられないことに気づかされた。器楽の現メンバー十数人の中では、私を除いて皆元上海劇団と滑稽劇団から転任してきた戯曲伴奏者だった。指揮者もおらず、楽器も揃わない。演奏レベルがまちまちで、楽譜すら読めない人さえいた。それで他の機関に頼んで数人出向演奏に来てもらい、なんとか楽譜の要求を満たすことができた。当時指揮者を担当してくださったのは文化局から出向してきた盛易新先生だった。痩せ細っていてベテランの音楽家だった。実を言うと、この劇の音楽はそう難しくはなかったが、リハーサルはけっこう手間がかかった。なぜかというと、演劇に伴奏するときは元々メインの二胡が先頭に立ってリードしてくれると、ほかの人はそれに合わせて演奏していけば良いのだが、今は総楽譜が出来上がっており、各声部は横がメロディーで、縦がテクスチャなので、少しもずれてはならぬことが分かった。指揮者の盛先生は音楽理論を解釈しながら拍子を取ったり、曲のリハーサルをしながら器楽の訓練にあたったりしたが、元々体調が優れていないお方なので、毎回汗だくで息切れしそうになるほど疲れていた。楽譜が分からないが敢えて指揮者に聞くのも憚っている大先輩もいた。それでこっそりと私に聞いてくるのだった。実は、私も口耳四寸の学で、ただ臨機応変の術にすこし長けているだけだったが、それでも彼らが私を馬鹿にすることを止めるのに十分だった。

芝居の下げいこも実に面白く、役者がセリフの読み合わせをする、動作の振る舞いについて切磋琢磨をするというのはもちろんのことで、舞台美術チームが釘で打ち付けて枠を創り上げるのも、バックとなる風景を描いたりするのも私には大変興味深かった。一番興味津々に見ていたのは道具チームが一から道具を作ることだった。門側に立っている石の獅子も、ごうごうと燃え盛る炭の火鉢も、まずは竹細工の材料でフレームを作り上げ、その上に布を張って造型する。それから古新聞紙を水に浸してできたパルプで細部まで作り上げていく。それが完全に乾いてきたら塗料で色を塗るとそれで真に迫る道具になる。中に仕掛けが施されている道具もあり、観客からはそれが本物のように見えて、俳優の演技にハラハラしたりする。

最も興味を惹かれたのは銃の小道具だった。長いのは発砲する毎に銃の撃鉄を引かなければならない旧式の歩兵銃で、短いのはグリップの部分に木の箱を取り付けたモーゼル拳銃で、抗日戦争題材の映画によくでてくる売国奴が使うような銃だった。いずれも舞台道具店から買ってくるものだが、本当に本物そっくりなだけでなく、火薬の紙を打つこともできるので、おもちゃの銃よりずいぶん面白かった。当時団内で道具の管理係を担当するのは馮群というおじいさんだった。私は暇さえあればいつも彼のところに入り浸って刃物を触ったり銃を手に取って

遊んだりした。公演中は、スタート合図用のピストルに使う大きな火薬紙を、専門の鉄製クリップにはさんで叩いた音で銃声の効果を出すようになっている。もちろんそのような火薬紙は専門の担当者のもとで保管されているため、簡単には手に入らない。私はよく公演前に、自発的に効果音担当の朱超さんにクリップの中へ火薬紙を入れるような手伝いをさせてもらったので、それを機にこっそりと十数枚を隠しておいた。その後楽屋に行って馮じいさんに銃を借りて劇場の裏口の外に行って発砲遊びを楽しんでいた。

二ヶ月ほど緊張感溢れるきつい稽古を通して、我々のこの革命を題材にする歌舞劇『農奴戟』はやがて中国共産党成立記念日のお祝いとして盛大に上演する運びとなった。公演場所は人民公園の向かいにある常州劇場だった。劇場の入口に大きなポスターが貼り出された。『常州日報』も公演情報を掲載した。特に今回は常州市文工団創立以来初めての出演となるので、市民達の深い興味をそそった。切符料金は四角、六角、八角に分けられ、一人当たりの俸給が30元余り程度の当時は、切符を買って劇を見にいくこと自体ずいぶん贅沢な行為だった。それにも拘らず、最初十五回の公演チケットは早々と完売することになった。正式公演前のリハーサルでは、市委指導部および文化局の幹部を審査として招いた他、我々出演者にも一人二枚ずつ切符が配られた。当時では、公演あるいは映画の切符を手に入れられることは非常に光栄で誇らしいことだった。そのためもあり、父と祖母はともに大いに喜んでくれた。人と会う度に口にして自慢げに

「孫の君ちゃんの芸術団は明日常州劇場で公演するのよ。切符も二枚ただで手に入ったわ。ほら明日早めに晩御飯を食べて劇を見に行かなくっちゃ。」

と言う。

隣の人は、「お宅の君ちゃんは本当に出世したわね。うちの偉君は比べ物にならないわ。ただ一日中工場で働くことしか知らないわ。映画のチケットさえ手に入らないわよ。今度は君ちゃんにうちにも切符二枚頼もうかしら、我々も見聞を広めに見に行かなくては……」

と羨ましそうに頼んできた。

「君ちゃんの団もそんなにしょっちゅう団員にチケットを配るなんてことはないからね、今回は初めてなのよ。次に余分な切符があったら、お誘いしますね。」と祖母は満面の笑顔で答えた。

関係者限定のリハーサル舞台は時間どおりに催された。役者達はメーキャップするために、午後5時にもう劇場に着いたが、私達楽団のメンバーは6時半に楽屋で集合することに。伴奏楽団のリーダーと指揮者はまず楽団のメンバー達に訓示を述べ、注意事項を知らせた。皆が躍起して、最大の努力を尽くして伴奏の任務を十二分にこなすよう決意表明をした。それから楽団メンバー全員で舞台の側面にあるトンネルを通ってオーケストラ席に入って調律し、楽譜を

チェックした。オーケストラ席は舞台の床からおよそ2メートルあまりの深い位置にある。一色に塗りつぶされた新しい楽譜スタンドは、わざわざこの劇のために買い入れたのだった。舞台が暗くなる時でも演奏者は楽譜が見えるように、楽譜スタンドの上に一人ずつ低電圧の楽譜ライトがはさまれていた。地べたに配線がたくさん並べられてあるため、歩くときは足元に要注意だ。演奏者はオーケストラ席に一旦腰を下ろすと舞台が見えなくなるのだ。高い指揮台に座る指揮者しか舞台上の様子を見ることができないので、私はいつも指揮者のことを羨ましく思っていた。高台に座って毎日舞台鑑賞ができるのではないか。その気持ちは、幼い頃バスの切符販売員のことを羨ましがった気持ちと同じだろう。毎日ただでバスに乗って町を巡回することができる上、それでお給料ももらえるから幸せな職業なんだろうなと思っていた。全く幼稚な子供心による考えではあったが。

公演は大成功を収めた。出演者全員が全身全霊を込めてすべての力を出し切って成し遂げた仕事だったからではないだろうか。皆公演のことを至難だが光栄極まる政治的任務だと見做しており、その仕事に対するまじめさは今の文芸団体では遠く及ばないレベルだった。舞台終了後、恒例によって指導層の幹部が舞台に上がって握手をして下さり、記念写真を撮影する時間になる。だだし、上層指導者と握手できるのはただ劇中にて英雄的人物に扮した役者数人に限られており、敵役を演じる役者にはそんな名誉は与えてもらえない。言うまでもなく、舞台裏で働くスタッフや私達伴奏楽団も同じくそばで見届ける権利しかなかった。

そこにわざわざオーケストラ席まで声をかけに来てくれた父と祖母を、私は指揮者の盛先生に紹介した。盛先生は父と祖母に、「おお、趙寒陽はとても賢い子でね、二胡の腕前もなかなかのもので、団内での素行も良いのですよ。」と誉め言葉をかけてくださった。父と祖母は遠慮しながら、「全部先生方のおかげです。今後とも厳しくご指導とご鞭撻のほど、よろしくお願い致します。」と答えた。

舞台終了後、チームごとにそれぞれ反省会議を行うことになっていた。もしも誰かが公演中に間違いを起こしてしまったら、批判と自己批判を余儀なくされるのであった。間違いを犯して反省会議で恥をかくといけないので、公演中では皆神経を張り詰めてまじめに臨んでいた。その時の文工団の芸術レベルと言えばそう高いものではないが、いわゆる思想上の革命性及び格式化された対処法のおかげで、公演の芸術的クオリティを最大限に保証できた。

我々生徒たちは集団活動して本部に寝泊まりする[8)]ことが定められているため、舞踏組の女の子達がメイク落としを終えた後、皆でいっしょに談笑しながら本部への帰路へと向かうのだった。交差点のラーメン屋を通りかかる時、いつも皆で一斉に夜食を食べに入った。その時、一度出演すると2両（1両は100グラム）相当の食糧配給切符[9)]と夜食費2角を受領することになるが、もらった食糧配給切符と夜食費を全部使うことを惜しく思って、1杯につき8

分のかけうどんしか食べなかった。食べたくてたまらないときにもせいぜい1杯1角2分のタカナと細切り豚肉入りタンメンあるいは焼き餃子だけで腹ごしらえをして、それだけで大変満足できた。私は1970年に入団して生徒になって以来、もう二度と父親に生活費をもらったことがなかった。そのことを私は心から誇らしく感じた。自分が自力で暮らしを立てられる労働者になったからだ。

革命歌舞劇『農奴戟』は常州劇場でまるまる一ヶ月にわたって公演されていた。どの日の会場も満員の観客でいっぱいで大きな反響を呼んだ。上層指導部が任せてきた任務を立派に全うしたということで、団内の反省会議にも、文化局の指導者が出席して公演の成功を祝賀した。団長先生からは本部全員10日間の休暇をせよと命令された。よく休息をとってリフレッシュした後、次の更なる大きな任務を迎えるために準備しておけとの命令であった。

しかし、私が帰心矢のごとしで休みに早く家に帰りたい一心でいたところ、突然屠須銘がいる事務室に呼びだされた。正直に言うと、私が最も怖いのはこの屠先生に呼び出されて面談することだった。しかし行かないわけにもいかない。それでえいっとばかりに思い切って団支部の事務室に入るほかなかった。

屠須銘はラタン製のひじ掛け椅子に座り込んでいて、左の足を右足の上にかけてのんびりしていたところ、私が入ってきたのを見て、「座りなさい」と言った。私はどきどきしながらそのそばの椅子に座り、また何かの災いが身にふりかかるのだろうと頭の中で思い巡らした。そこに屠須銘は、

「最近、思想レベルはどれぐらい高めたかい」と聞いてきた。

私は、「えーと、毎日頑張って毛沢東主席の著作を読んで勉強しています。特に過ちも何も犯していません。」と答えた。

「そうだね。やはりお前は進んでいると俺も思う。厳しい試練でもあろうが、党は今君に任せる光栄な任務がある。できるか。」と屠須銘はまるで目下に命令を下す首長のような口ぶりで厳かな表情で言った。

「はい！　必ず党が任せて下さる任務を全うさせていただきます！」と私は口先でしっかりと答えたが、なにかをさせられるのに、嫌だという「い」の言葉でも口にできるものかとひっそりと心の中で思っていた。

「良し！　党中央は現在5.16反革命集団を深部から掘削する政治運動を展開するよう全国人民に呼びかけている。我々の団の中にも5.16反革命分子がおり、常州市文工団革命委員会が調査を通して、君を深部掘削5.16学習班に参加させることに決めた。」小声だが、屠須銘の話に私はまた仰天した。即座に立ち上がって言った。

「屠先生、私は何が5.16かさえ知らないのに、どうして反革命分子になるのですか。反革命

のことなんか絶対にしていませんよ。」屠須銘は手を振って私に座るように指示した。

「緊張しないで。君が5.16反革命分子だとは言っていない。逆に君は出身も問題ないし素行もいいから、更に君に対して挽回教育を施すために、階級闘争の最前線に派遣して訓練させようと考えているわけだ。学習班に行ったら、階級の敵と断固とした戦いをするんだよ。自分の立場をぶれずに守って、規律正しく行動する！　それを再前提にしなさい。行く準備をしてらっしゃい。もうすぐ出発だ。」

このいわゆる全国範囲での5.16反革命集団を深部から掘削する運動とは、元来「四人組」が党の権力を奪い取るために画策する政治的陰謀策で、中国歴史上で最大の冤罪であった。しかし当時あのような白色テロのような政治環境下において、確かに皆が精神的に一刻も安堵できない緊張状態にあり、すこしでも油断したらなんらかの「帽子」を被らされる結末となり、その上「地べたに倒されてさらに一足蹴られて踏みつぶされ、二度と立ち上がることができなく」されてしまうのです。

この「『5.16』を深部掘削する学習班」は、麻巷に位置する常州市第三人民病院の中庭にある部屋に設置されている。常州市第三人民病院は元来伝染病治療を専門とする病院で、この中庭はさらに「関係者以外立入禁止」とされる秘密の場所となっている。拘禁された「5.16」容疑者は元上海劇団の脚色演出家で、「運動員」（スポーツ選手の意が元であったが、ここで特に文革運動にて管制処分の対象とされている者を揶揄して言う言葉として使われている）としてもベテランであった。生まれつき良い出身でなかった上、後になっても毎回「革命運動」にて管制対象とされており、今回も依然として悪運から逃れられておらず「学習班」に閉じ込められたわけであった。その氏名を公開するのはよろしくないため、拙作中では一応五さんと呼ばせていただこう。

学習班と称されるものの、実はいわゆる「5.16」分子に対する迫害、酷刑の自白を強いる拷問室であった。一旦ここに入ったら、この五さんは自由を失っただけでなく、彼を監視する人までも、「注意事項三箇条」を告知されるのであった。即ち、外出をしてはならない、家族と連絡を取ってはならない、階級闘争と関係がないいかなる業務活動もしてはならない。学習班全体が秘密厳守と閉鎖状態を強いられている。

学習班では監視される五さん以外に、取り調べ担当者三名と監視担当者四名の体制で、交替で看守の当番をしていた。取り調べ担当者は団革命委員会のメンバーが兼任しており、屠須銘もその一人だった。普段は昼間勤務で、勤務時間が終わったら帰宅できるのだった。監視担当は団から出自階級も問題なく、「文化大革命」に参加したこともない若者を抜擢して担当させるもので、私はその中の一人に当たる。監視担当は二人一組で、昼組と夜組の当番制で責任を果たしていく。しかし自分の当番時間が終わってもそこから外へ出てはならないことになって

いる。そこの中庭に四つの部屋が配置されており、一つは五さんの監視室で一つは取り調べ担当者の休憩室、その他の二つは我々監視担当の宿舎となっている。生活用品はすべて病院の入院部より提供された。布団、シーツなどを含めて、皆「常州市第三人民病院」の字が印刷されてあった。その時の私もさすがに若さ故の世間知らずで、うんざりするような病床への嫌悪感もあまり持っていなかったし、持っていたとしてもなにも違う要求を出してはならないと最初から諦めていた。私達の任務は五さんに対して監視看守を実行することで、なにか異常が起きたら直ちに報告することだった。それ以外に、五さんが生きていく上で必要とされるすべての世話をするのも全部私達の仕事だった。例えば：ご飯を運ぶ、水を汲む[10]、便器の排泄物[11]を処理するなど。また彼の寝起きの時間を守るよう、ベッドから起こすなども仕事の一つだった。

この「学習班」は一体どんな目的で五さんをここに拘禁したのだろう。他に「5.16」分子の仲間はいないか、それを白状させるのが最大の目的だったらしい。彼は一つでもその名前を挙げれば、その人はたちまち隔離され取り調べられることになる。かつて学習班の取り調べ担当員の一人が突然入れ替えられて消えてしまったことがあった。後で人から聞いた話で分かったが、彼の名前がこの五さんに言及されたため、翌日即座に隔離調査させられたのだった。幸いに今の私達四人は根がまっすぐな若者で、「文化大革命」にも参加したことがなく、生まれつき「免疫力」を備えていたようで、心配無用のようだった。そうでなければやはりいつ摘発されるか、不安でよく眠れない日々を送らなければならなかっただろう。

五さんの監視室の中は、ベッド一台、机一台、ペン一本、紙一束の他に何もなかった。腰掛けさえ一脚もなかった。それを持ち挙げて人に振ってけがさせるのを防止するためだった。食事を取るために30分間しか与えない。毎日午前5時から午前7時までの2時間しか睡眠時間を与えない。残りの時間は尋問時間を除いてひたすら自白書類を強制的に書かせるのだった。一回に次いでもう一回、十数回に次いで二十数回も反復して書かせる。それから取り調べ担当者が繰り返し毎回書いた書類ごとに照らし合わせてチェックする。違うところが一つでもあれば、そこを選び出してそれに対して尋問する。あとになると、五さんは数十ページもある自白書類を悉く暗唱できるようになり、何回書かされても一文字も間違えずに書くようになった上、自白書を書くことを習字の良いチャンスだと看做し、真剣に、一画ずつ慌てずゆっくりと書くようにして、出来上がった書類はその字が本当にきれいそのもので、まったく習字の良い手本になり得るものだった。

食事の時間に私達はいつもまず二人で食堂に食べに行き、それから彼のご飯を持ち帰ってくるようにしている。毎回三両のご飯と一人前の野菜しか与えない。彼の給料はすべて取り調べ員が代わりに保管しているけれど、肉料理を絶対に買って与えないようになっている。それは

上からの「敵に対して温和・善良・恭敬・節制・謙譲してはならない、つまるところ敵に対して温情が過ぎて闘争性に欠けるような行為をしてはならない」という定めによるのであった。

五さんのご飯を持ち帰る人が戻ってくるとまた他の二人が交替して食事に行く。紀律規定によれば学習班の中では常時二人の看守監視員が見張っていなければならないことになっている。五さんが看守員を意識不明なまで殴り倒して逃走する恐れがあるためだった。ふだん私達には他にやることもないから、暇つぶしに彼の人事档案ファイルと自白書を小説のように読んでいた。理屈から言えば、一人の人事档案は重要な書類で、適切に専門の部門で保管されており、誰しもが簡単に目にすることができないはずだ。しかしその時彼のファイルは普通にテーブルの上に投げつけられてあり、尋問担当員もわれわれに目を通すように言いつけ、それによっていっそう階級の敵の真の姿をはっきりと見分ける眼力をつけるのだと言っていた。当の五さんの書類は本当に複雑で、一寸余りの厚さもあろうか。毎回革命運動で取り調べられた情況が記載されており、彼が自分で書いた各種の自白書も添付されている。その時私達が読んでみると、字面からやはり彼はいい人ではないと読み取れ、罰を受けるのが当然だと思っていた。しかし監視室に行ってみて、彼のあのような可哀相な様子を目の当たりにすると、また今のような対処の仕方は彼にとって多少残忍ではないかと思えてくる。同時に彼が突然飛びあがって私達に暴力を振って殴り倒すのではないかと恐れてもいた。そのため誰も軽率に彼の監視室に入る勇気がなかった。

時間はこのように毎日毎日退屈な中で流れていき、そんな中でも私にとって最も耐え難いのは、二胡に触れられないことだった。そこである日夕食を済ませた後、私の当番ではない隙間を見て、他の看守を務める3人にこそこそと探りを入れるように、表情を注意深く眺めながら聞いてみた。ちょっと団に戻って生活に必要な物品を取ってきてもいいかと。連日一度も予想外のハプニングが発生したことなく無事に過ごしてきたので、皆の警戒心もすでに和らいできたためか、彼らも「さっさと行って、早く帰っておいでよ。」と承諾してくれた。私は特赦令でも入手できたかのように、素早く病院を走って出ていき、湯錦慧さんの家に向かってまっしぐらに走った。病院から彼女の家までは、散歩して5分、ランニングだとただ2分だけを要した。錦慧さんの家に着いたら、彼女自身も弟の錦亮君も、お父さんもお母さんも皆いたので、私が突然姿を現したのを見て、ご家族一同喜んでくれた。最近どうですか、どうして長い間遊びに来ないのですかと近況を尋ねてくれたが、私はかいつまんで近況報告し、今日来たのは、一か月も二胡に触れることがなかったので二胡に触りたいだけだからだと説明した。そこに、錦亮君は彼の二胡を手渡してくれると、私はたばこ中毒の人が一本のたばこをやっと手に入れたかのように手に取ってすぐ弾き出した。本当に再び二胡の弦を弾くことができた嬉しさと楽しさを存分に味わえて心から満足した。

少しの間二胡を楽しむと、長く逗留してはいけないと自明しているので錦慧さんご一家に別れを告げ、病院に走って帰っていった。到着を報告しようとすると、もうおしまいだと知らされた。事がどうしてそんなに運悪く運ばれたか、平素夜間尋問担当者はここにくることはないのに、その晩に限って屠須銘氏がやってきた。私がいないのをみて、趙寒陽はどこに行ったのかと皆に詰問した。団に生活用品を取りにいくだけだというからすぐ戻ってくるだろうという誰かの答えに、屠氏が「これはまさに紀律違反じゃないか。ここでやつの帰りをまってやろう。」と、めらめらと燃え上がる怒りを覚えたらしい。

私が戻ってきて扉の中に踏み込むと、屠氏がそこに座っている姿を目にして、雷が落ちてきたかのように脳裏が「ぶん」と鳴った。悪い結末が待っているだろうと覚悟した。仕方がなく、びくびくして歩いて行って、

「屠先生。」と呼んだ。心細くて声の勢いが弱いことがバレバレだった。

「どこに行ってきましたか。」ほら、私に対する尋問が始まったのだ。

「私、私、私は、本部に行ってきました。」

私は答えた。

「何のために団に行ってきましたか。」

「ものを取りに行ってきました。」

「何を取ってきましたか。」

まずい。明らかに手ぶらで帰って来た私だった。

「本当に、何を取ってきたというのか！」

「私、私、何も取ってきていません。」

「じゃ何をしに行ったというのか！　率直に言え！」

屠氏の態度がますます厳しくなってきた。

「私、私は、ただ、ただ、友達の家に行って、二胡をすこし弾いてきました。」私は白状するほかなかった。

「よし！　こんなに鋭い階級闘争を目前に、君はよくも戦闘の持ち場から離れて二胡を弾きに行けたね。君の考え方は依然としてなにも変わっていないようだ。すぐ反省書を書いて私に提出しなさい。思想の根源にある問題点を真剣に掘りさげるように。」

屠氏はそう言いながら、また他の看守担当の 3 人に対し、

「君達も紀律を守らなくちゃいけない。勝手に出入りしてはいけません。特にこの趙寒陽！しっかりと彼を見張るように。もう二度と外へと出るのを許してやってはいけない！　そして思想上の向上も、彼に手助けをしなさい。」

その 3 人も息をするのも恐々になったようでひたすら「はい！　はい！」と承諾するほか何

もできなかった。さすがにここは階級闘争の最前線で、屠氏もまた革命委員会の寵児だけあり、いったん「思想が革命的でない、立場が定かでない、路線が明らかでない、闘争が有力でない。」などの罪状を被らされたら、本当に笑いごとではないのだ。

彼が去った後、3人が皆私を慰めに来てくれた。学習班の中でしっかりと働いているし階級闘争の観念もとても強いのを証明できるようなことをたくさん言うので、真剣に反省書を書いて提出して屠氏の許しをもらえれば、今度の件はもう過ぎ去ってしまうだろうと。そう聞いて心の中はいくらか少し落ち着いてきた。どのみち就寝時間まではまだ時間があるので、反省書を書き始めることにした。

たった一日が過ぎ、私の反省書もまだ提出するのに間に合っていないうちに、学習班には一大事が起きてしまった。その結果私が看守職から離れてしまった問題も取るに足りなくなり、とうとううやむやのうちに棚上げされてしまった。

この五さんは拘禁されている間、人生の苦難を受け尽くした。尋問される時腹を蹴られてそこにしゃがんだまま長い時間立ち上がれなくなったり、顔にびんたを食らわされて、鮮血がたちまち口もとに沿って流れ落ちてきたりしたが、私達はもう見慣れていて少しも珍しくなかった。私はそんな場面を目にして心の中も本当に可哀そうだと思ったが、しかしどこに本音を出せる勇気があろうか。それはもはやプロレタリア階級としての立場の問題で、まして自分もまだ「教育挽回」の真っ最中の身であった！　しかし彼にとって最も辛かったのは、十分寝られないことだった。毎日午前5時にやっとベッドへ上がるのを許され、朝7時になったらすぐにベッドの上から引きずり起こされてしまう。睡眠不足は直接昼間の居眠りの原因になるが、尋問員は少しの間も置かずにちょこちょこと見張りに監視室に足を運ぶ。彼が伏せてテーブルの上で居眠りしているのを発見したら、直ちにテーブルを全力で叩いてひどい震動で彼の目を覚ます。暫く経ってまた彼がテーブルに伏せて居眠りしているのを発見すると、彼の髪の毛をぐいっと捕まえて、顔にびんたをくらわす。一日二日ではまだ堪え忍べようが、一ヶ月以上も続くと、人間としてはもう気が狂ってしまうだろう。恐らく彼はもしもこのままではきっとここで死んでしまうだろうと考え、その日の夜中に、監視員が気のゆるんだ隙になんと人一人の高さがある後ろの窓から飛び降りて逃走した。当番に当たる阿寿君が監視室の定例検査に行く時、扉を開けたら人影がないのを見て、後ろの窓が開けっぱなしになっているのに気づき、まずい！　とすぐに悟り、大声で叫び出した。

「皆早く起きろ！　5.16分子が逃げちまったぞ！」

そう叫びながら外へと追いかけていった。

この中庭はすべて平屋で、とても高いとは言えない。阿寿君は扉の外に走って屋根上に黒影があるのに気づくと、塀を越えて病院を逃げ出そうとする様子が見えた。幸い阿寿君は20歳

余りの若者で、芸術団ではダンスが専攻で、体も頑丈で力強い。その時も力強く足で地面を踏ん張って手を十二分に伸ばすと、その瞬発力で屋根上に上り詰めた。そこから死力を尽くして相手と戦いを始めたのだった。

私達は叫び音を耳にして、皆すぐ服をはおって扉の外へと走りだした。ちょうどその前の数日間にわたる部屋の修繕で、そのまま梯子が塀上に寄りかかっているのを見て、皆で急いではしごの移動に力を合わせた。五さんの方は、捕まったらどうせ死ぬだろうと覚悟しているらしく歯を食いしばってやっつけてやろうと阿寿君と必死に戦っていた。事がここまで至っては、もう本当に生きるか死ぬかの階級闘争になったと言っても過言ではなかったろう。

二人は屋根上で死にもの狂いの取っ組み合いを繰り広げている。五さんは心の中でこう覚悟していたのだろう。お前を抱いて地面へと転んでいこうではないか。こちらが落ちて死んだら、もうこれ以上ひどい目にあわないで済むだろう。お前が落ちて死んだら、私も元がとれて損はないだろう。そこで、足を屋根から一歩離すと、二人は屋根の坂に沿って下を向いて転がっていった。もしも本当に地面まで落ちていったら、先に地面に着く人はきっと命を失うか大けがをするだろう。二人が軒先まで転がった時、阿寿君は足で必死に雨水を流す溝につかまり何とか地面に落ちずにすんだ。そこにまたはしごを上って屋根上に上った若者 2 人が参戦し、五さんの方はげんこつを何発か食らったらもう反抗能力を失なってしまい、皆にしっかり捕まえられて下へと引っ張られていった。

監視室に戻ると、誰かが椅子を運んできて、縄で五さんをしっかりと椅子に縛り付けた。皆はそれでやっとほっと一息をついた。阿寿君を見ると、服も引き裂かれたし、顔にも手にも擦り傷ができてまだ血を流しているではないか。私達は皆阿寿君の何者をも恐れない革命精神に心から大いに敬服した。皆次から次へと彼に着替えの手伝いをしたり、傷口の手当をしてあげ、病院の本拠の建物まで走って薬を持ってきて彼に手当をしたりして、夜が明けるまで大忙しだった。

本当のところ、その日の事を振り返れば、私たちは阿寿君のおかげで救われたのだった。もしもその時五さんを逃がしてしまったら、あるいは屋根から地面に落ちて死んでいたら、あるいは闘いの中で阿寿君が落ちて死んでいたら、私達の負うべき責任は大きすぎて負っても負いきれないものであったろう。そのため、皆は心の底から阿寿に感謝して、彼を兄貴のように敬った。

当時電話はまだ普及していなかったため、尋問担当員は午前勤務に来た後にやっとこの事を知ったのだった。五さんに対してより厳しい取り調べを行うほかに、文工団革命委員会は阿寿の勇敢な行為に対して顕彰を行い、党支部は阿寿の即決入党を進めた。

それから私は依然として学習班における自分の職責を尽くしており、何事も起きずに半月余

りを過ごすと、はらはらさせられる事件が再度発生した。

それは急な雨風に見舞われた嵐の夜で、私の当番ではなかったので、とっくに夢の世界に入って時間が経っていた時分だった。当番に当たる阿青君は五さんの監視室に定例検査に行って扉を開けて見るとテーブルの前にもベッドにも人がいなかった。まさかまた逃げたのか。焦った阿青君は大声を出して叫んだ。

「皆早く起きろ！　5.16分子はまた逃げちまった！」

そう叫びながら屋外へと突き進んで走っていった。

私達はその叫び声を聞いてすぐベッドから起き上がって、暗闇の中で何らかの服をつかんではおりながら屋外へと走っていった。外は雨が降り続いており、何の異常もなく静まり返っている。屋上を見上げると人影もなく、監視室の窓を振り返ってみても、ちゃんと閉まっているので開けっ放しになっていない。それできっとあいつは扉の後に隠れていて、誰かが入った途端に襲撃するのではないかと皆が考えた。そう思いながらまた皆で走って戻ってきて、監視室の扉が半分開いているのを見て、阿青君は力を入れて強く扉を押してみた。あいつがもしも扉の後に隠れていたら、そのまま彼を挟んでしまおうと考えたらしい。結局扉が重くて、いくら力を入れて押しても全開にならなかった。明らかに扉の後に何かが当たっているような感じだった。そこで阿青君はまた叫びだした。

「僕はこのまま扉を押すから、皆で中に入って！」

私達は、一人一人が厳重に警戒して階級の敵と闘う覚悟をしながら監視室に入った。阿寿君は一目で扉の後ろに誰かが隠れているのに気づき、一喝した。

「出てきなさい！」

その人はちっとも動かなかった。阿寿君はまた一喝してみた。

「早く出ておいで！　お前は自らわれわれ人民とのつながりを断ち切ってはいけない！」

その人はそれでもやはり動かなかった。皆はどうもおかしいと感じ始めた。阿寿君はそれで「阿青君、もう扉をおさないで早く中に入ってきて。」と言った。

阿青君は手を放すと、扉はぱっと開いた。皆はこれでやっと状況を確認できた。五さんは扉の後ろにある大きな釘に一枚のマフラーをかけて首を吊って自殺をはかった。その釘はもともとタオル干し用に針金を張ったものだった。そのような事態は誰も遭遇したことがなかった。皆が「しまった、しまった！」と驚き呆れてそれ以上の言葉も出ずに、棒立ちするほかなかった。しかし阿寿君はいろいろ世間を見てきた人で比較的冷静だった。彼は五さんを抱きあげて上へとぐいっと持ち上げて、「早く！　早く解いて！」と叫んだ。

さすがに肝っ玉が大きい阿青君は、マフラーを解いて阿寿君を手伝って五さんをベッドまで抱いていった。幸いにここは元々病院の中なので、誰かが急ぎ足で医者を呼びに行った。数分

後に、白くて丈の長い服をまとっている医者四､五人が酸素ボンベなどを押しながら駆けつけてきた。まだ早いうちに発見できた上、吊っていた時間もまだ短かったためだろうか、それにマフラーも比較的太いものだったので、五さんには一筋の息がまだ残っていたが、すでに意識を失っていた。医者達は急いで五さんに強心剤を打ち、また酸素ボンベをつなぎ、人工呼吸もするなどして夜が明けるまで緊急処置を施し続けた。それで五さんはついに一命を取りとめることができた。

それからの七日間は、五さんはずっと意識不明の状態のままで、口の中から白い泡を吐いており、静脈滴注のブドウ糖に頼って命が維持されていた。監視室全体がこの上ない生臭さで溢れている。どのみち五さんが再度逃げ出す恐れもなくなり、私達もご飯を届けるお世話も省けた上、医者が二時間ごとに部屋の巡回をして下さるので、私はやむを得ない状況がない限り、決してその監視室に入る勇気がなかった。私は彼の蘇生する日を見届けることができなかった。「特赦令」が下されたからだった。

常州市文工団は７月にみごとに革命の歌舞劇『農奴戟』[12)]の舞台を成功させた後、市委員会と文化局の指導者達より高く評価された。その時ちょうど中央は革命的模範劇を普及させるよう強力に呼びかける真っ最中で、上級指導者は革命のモダン・バレエ劇『赤軍女子連隊』を上演させるという光栄な任務を我々の文工団に任せることを決定した。春節の際に全市人民に向って祝いの贈り物ができるようにと指示を下したのだった。

革命的模範劇とは名前の通り、必ず決められた見本の通りに上演しないといけない劇のことで、各方面においてすべて見本団と同じ編成と要求を満たさなければいけない。その他の面はまだなんとかできようが、ただ楽団は大きな難題だった。まずは人員が不足していること。在籍しているメンバーは革命的模範劇の楽団の編成要求を満たすのにまだ程遠かった。それに楽器も揃っていなかった。元の楽団はただ小型の民族楽団にすぎず、革命的模範劇を上演するのには少なくとも単管制の西洋管弦楽隊が必要なのだ。そのため、団の指導者は外に分散している楽団メンバーをすべて呼び戻すように指示を出すほか、また労働組合総連合会のアマチュアオーケストラから短期的に数名の人員を調達して団の仕事に来てもらい、革命的模範劇『赤軍女子連隊』[13)]の舞台を成功させるという光栄な任務を全うさせることに全力で努めた。一枚の人事移動指令は「学習班」[14)]まで下され、私はやがて「刑期満了釈放」となった。

家に戻った私の事を、父と祖母が別人のように見ていた。

学習班にいた二か月の間、散髪したことも入浴したこともなく、服を着替える事すらなかった。本当に刑務所から出た人間のようであまりにも可哀そうにみえた孫を目の前に、心がうずくほどに慈しんでくれた祖母のその時の様子が、私は今もなおはっきりと目に浮かぶ。彼女は

涙を浮かべながら何度も繰り返し言っていた。

「見てごらんよ、どうしてこうなったの。もっと前にこんなことになるのを知っていたら、文工団なんかに行かせなかったよ。」

私は慌てて祖母を慰めて言った。

「大丈夫だよ。何事もなく無事に帰ってきたからね。」

しかし実のところ、その時私の心の中は混乱状態で、しばらく落ちつくことはできなかった。自分は団の中で「ブラック・リスト」に入れられたのではないか、これからあの屠須銘先生はどう私を虐めるのだろうか、革命的模範劇を上演させるために西洋楽団を要すると聞いているが、私には何ができるのか。それに学習班に閉じ込められている五さんのことも思い出し、私がそこから離れるまで彼はまだ目が覚めていなかったが、これから目が覚めることはあるのだろうか等々、一日中ずっと思い巡らせていた。ずいぶん後に聞いた話では、その後五さんはやがて蘇生して引き続き学習班で審査を受けていたが、その後実家まで送還された。「四人組」[15]が打倒され、「文化大革命」[16]も終わった1978年に、彼の名誉回復のために団がわざわざ大会を開いて徹底的に長年の冤罪を償った。その後彼は団の仕事にも復帰できたそうだ。私がすでに常州市文工団を離れて北京にある大学に赴いた後のことだったが、折よくある夏休み期間中に、私は休暇を過ごすために常州に戻った際、文工団（その時すでに「歌舞団」に改名）に寄った時、彼に偶然会ったことがあった。私は一目で彼だと分かった。心の中では、あの五さんではないか、長年会っていないが何も変わりがないようだなと思っていた。彼は恐らく私だと分からなかったようで、隣の人に誰だと尋ねたのだった。「趙寒陽だよ。私達の団員だったけれど、今北京の大学に合格して、大学に通いだしたのよ。」云々と隣の人から聞くと、「へぇ」と答えただけで余計な話を何もしなかった。これは私が学習班を出てから唯一彼に再会できた機会だったが、ずいぶん後の話になる。

文工団の楽団にとって革命的模範劇『赤軍女子連隊』の舞台稽古は、実にもう一度生まれ変わるような大革命だった。まずそれぞれのメンバーが必ず自分の専攻の他に一種の西洋楽器を新たに身につけなければいけないこと。そして楽譜は一律五線譜になっており、それを読んで演奏すること。ホルンとチェロの中から選ぶように団の指導者に指示を出された時、私は迷いもなく後者を選んだ。それで楽器室より上海製のチェロを交付された。ところでどう練習するかは自分で考えなければならなかった。私はあらゆるところに頼んで、ついに一冊の『弦楽器の演奏法』という本を借りることができた。それはバイオリン、ビオラ、チェロ及びコントラバスを総合的に紹介する普及型の読み物で、挿し絵も文章も内容が豊富で分かりやすかった。私は至宝を手に入れたかのように、二日間を費やし、本の中にあるチェロについての部分を丸ごと写し取り、十数枚の図さえトレーシングペーパーでなぞって写し取った。それから型通り

にやっていたら、僅か一週間だけで音階を身につけることができた。昔五線譜の知識について独学したことが、この時実に大いに功を奏した。振り返ってみると、生涯伝統演劇の伴奏に努めてきた目上の先生方が本当に可哀そうに思えた。もともと数字譜[17]さえきちんと読めないのに、今やあのすきまない「小さいオタマジャクシ」みたいな五線譜を読むのを強いられるとは、まるで私達が数千年前の甲骨文を目にする時の心情と同じなのだろう。しかしそこはもう革命的模範劇に対する態度の問題で、大胆に「そんなのできないよ。もうやらん！」と口にできるものではない。それで皆同じく西洋楽器を手に取って老眼鏡をかけ、少しずつかじりついていくしかない。しばらくの間、本部がとてもにぎやかになり、楽器の音が絶え間なく伝わってくる。決して心地良い音色ではないが、実に士気高揚だった。

労働組合総連合会のアマチュアオーケストラの同志たちも加わってきた。彼らの中に本当に元楽団あるいは軍楽団で務めたことがあるメンバーがいた。そこらへんにある管楽器を何気なく手に取って音を出してみせただけで我々が仰天させられたのだった。「しっかり勉強しよう」と私は心の中で自分に言い聞かせた。

この『赤軍女子連隊』という劇は、私達が無錫市歌舞団に学んできたものだった。本部が命令を下し、各チームは早速精悍な勇士を選抜し、無錫に劇の勉強に向かわせた。楽団は庄天才、駱懐民と私など六人からなる写譜チームを組み、無錫市歌舞団宿泊所の部屋の中で、写譜の戦場を整えたのだった。テーブルの上に並べられてある二寸余りの楽譜を目にしては、締切日まで五日間しかない事を考え、皆頭がしびれる思いをした。

早速取り組もうではないか。一人一人がテーブルの上かベッド板の上で自分の陣地を取った後、早速鉛筆や直線定規を取って写譜の戦いを始めた。その仕事は本当に大変でたまったものではなかった。私は五線譜の知識についてすこし学んだことはあるが、まだまだ熟練ではない。なによりあのような複雑な総合楽譜を見るのも初めてだった。はじめは線を数えながら書き写していたので写すスピードは大いに遅れていた。しかし一日も経つと、私の五線譜を書き写す技巧がすでに皆と似たり寄ったりになった。何日かすると、私のスピードと品質がすべて一番になった。しかし思いも寄らぬことにそれから団が私を楽団の写譜専門員に指名するようになり、毎回新しい劇に取り組む際、いつも楽団全体は休みになるが、写譜担当の私は徹夜を余儀なくされ、心身共に疲れきっており、苦しみに喘いでいた。ある時、私は本当に我慢できなかったので、病院で働く同級生に頼んで病気のためという欠勤届を出してもらい、なんとかその時の写譜任務から逃れた。そのため、例の屠須銘先生から何度も聞かれたが、最後まで隠し通したので、諦めてくれた。

無錫で楽譜を書き写す仕事に従事していた間、皆毎日13、14時間前後働き続けており、目も真っ赤になり、手にはたこもできた。最後の1ページの楽譜を期限どおりに完成させた時、全

員へとへとでベッドへ倒れ込み、そのまま長い時間会話もできなかったほどだった。

それから団に戻り、また何日間かの奮戦を経てそれぞれの分の楽譜も写しそろえた。ついに楽団の舞台稽古が始まった。指揮者を務めるのは余傑先生で、彼は上海音楽学院の優等生で、楽団指揮者としても長年の豊富な実践経験を積んでおり、大のベテランだった。われわれは単管制の管弦楽隊で、弦楽がバイオリン16、ビオラ6、チェロ6とコントラバス3を用いている。私は6つのチェロの中で最後の一人だった。

1日目のけいこで、私は目は楽譜を見ているが、手はまったく追いつかなかった。楽団が休憩に入ると、他の人が皆お茶をすすったりたばこを吸ったりしている間、私は一生懸命自分が担当するパートを練習していた。昼休みも夜も一人でけいこ室の中に身を浸して練習を続けていた。今度は誰もが私のことを「白専路線」を突っ走る異端分子だと訴える人がいなかった。皆一様に私が革命的模範劇を普及させるために基礎的な訓練を懸命にこなしていると認めてくれていた。春節の正式公演までに、私は自分が演奏するチェロのパートについてほとんど暗譜することができるようになり、技術上でも完全にクリアできるようになった。一人の潜在能力が確かに非常に大きいことを実感した。どんなにきついことに直面しても歯を食いしばって全力で対処していけば、できない事がないことも体感した。私がチェロを手にしてから、三、四ヶ月しか経っていないうちに、なんとオーケストラの中で皆と席を並べて『赤軍女子連隊』全劇を演奏できたことが、私が自分の従事している職業に対して大きな自信になった。時が経つにつれ、私はチェロパートのラストから、次第に首席の位置まで上がり、その上1976年のある舞台公演にて「サリハは毛沢東の戦士」[18]と「映山紅（つつじ）」[19]の両曲の独奏をこなせて、常州の文芸業界にて小さなセンセーションを引き起こしたことがあった。

春節期間中に私達はついに常州市内最大規模の劇場――紅星劇場において革命的モダン・バレエ劇『赤軍女子連隊』を上演した。これは完全に模範劇団の要求に従って演出するバレエ劇で、その陣容の強大さにせよ、場面の宏大さにせよ、常州市文芸舞台で前代未聞の大規模なものであり、しばらくの間、お茶の間の話題となる出来事だった。古き諺でも謳われる通り、「舞台3分、稽古3年」。それは実に確かであった。今回の公演のため、団全体の百数人が全力で対処した苦労は、言葉で表せるものではなかった。舞踏組の女の子達のことだけでも触れさせていただくと、バレエの基礎訓練で足の爪も抜け落ちていたりして靴下も血で足にくっついて脱げなくなり、痛みであぶら汗をかくこともたびたびあった。彼女たちと比べたら、私が徹夜して楽譜を書き写すことや、昼も夜もチェロの練習に没頭したことは、なにも大したことではなかったのだ。

1971年、常州市文化局は当市文芸事業の発展を遂げ、より一層多くの芸術人材を育成するため、上層指導部の許可を得て、また新たに「常州市文芸学校」を創立した。学校は人民公園

の中に設置されており、数十人の新入生を募集した。それらの新入生は私よりも歳が若く、少し年上でも中学を卒業していない人、最も年下の人は小学校を卒業したばかりだった。学校創立の当初だったため、まだ教師が足りないので、大部分の学生を私達の団に置いて委託養成を依頼してきた。私達の楽団にも数名の学生を割り当てられた。それから、楽団のけいこ室にカチカチと鳴く小さな「カササギ」が加わり一段とにぎやかになった。

『赤軍女子連隊』の公演後に、労働組合総連合会のアマチュアオーケストラからそのまま常州市文工団の仕事に転じてきた一部の同僚の他、残りの人は続々と各自の持ち場に戻っていった。楽団はやむを得ずベテランが新米を教育するという方法を採り、常州芸術学校の若い学生達を育成するしかなかった。そのため、自分がやはりまだ学生の身分でいながらも、先生として、一人目のチェロの学生の面倒をみることになった。それ以外にまた、芸術学校の学生達に音楽理論の授業を担当することになり、編纂した講義は1976年に『音楽の基礎理論』として一冊の完全な理論書として整理して文化局の審査に届け出た。それは好評を博す出版物となった。実は私は彼らに比べて二、三歳の年の差しかなく、自分でもまだ腕白な子供の気分でいたが、私が学生達に講義する時のようなまじめな表情を、彼らは今なお鮮明に覚えてくれているらしい。

1973年4月、一枚の学生修了証書は私が文工団にて弟子から卒業したことを証明した。そのお祝いのために、父親が私に三点の貴重なプレゼントをしてくれた。真新しい鳳凰ブランドの自転車、上海ブランドの腕時計と家の中のベッド1台――私が昼間自転車で仕事に向かい、夜家に帰ることが許されたのだった。それで私は毎月17元の給料で独立生活を維持できる一人前の正式なプロレタリア文芸戦士に転身できたのだった。

その年、私は18歳だった。

注

1）文工团 wéngōngtuán　演劇団。中国各地方政府に所属し、芝居、演劇、歌唱、演奏などの音楽活動する団体。

2）爷 yé　北京方言で旦那。業界の先輩男性に対する敬称。反対語は孙子 sūnzi　青二才、出来損ない。

3）学徒 xuétú　見習、新米。

4）师傅 shīfu　師匠、親方、先輩。

5）老虎凳 lǎohǔdèng　拷問用の道具。長腰かけに座らせ、膝上を腰かけに固定させ、足を無理やりにあげて拷問する。

6）白专道路 Báizhuān dàolù　技術や学問などに専念し、革命活動にも感心のない人のすること。红专道路 hóngzhuān dàolù　革命活動に熱心な人のすること。

7）油印 yóuyìn　ガリ版印刷

８）住团 zhùtuán　演劇団の寮に宿泊すること。

９）粮票 liángpiào　1980年代末までの、計画経済による国からの食糧配給チケット。南方は米、北方は米と雑穀。成人男性は一カ月約14kg、女性は約13kg。このほか油票 yóupiào　食用油チケット。大学生は一カ月100g ほどで、学校の食堂で集中管理。肉票 ròupiào　食肉チケット。成人は一カ月ほぼ200g。布票 bùpiào 布チケット　などがある。

10）打饭 dǎfàn　食堂からご飯とおかずを買ってくること。打水 dǎshuǐ　所属部署のボイラーからお湯を汲んでくること。打车 dǎchē　タクシーをひろう。

11）尿盆 niàopén　トイレのない部屋に用意する小便用のお盆。尿瓶。

12）农奴戟 nóngnújǐ　奴隷の戟。毛沢東の詩作『七律到韶山』の一語。上海人民芸術劇院演出の６話新劇。

13）紅色娘子军 hóngsèniángzǐjūn　赤軍女子連隊。即ち中国工農紅軍第二独立師団女子軍特務連隊。バレエ「赤軍女子連隊」は、李承祥他監督の、中央歌劇舞劇院バレエ団による６幕のバレエ。革命バレエとも言うが、これは、松山バレエ団が1958年中国で中国映画『白毛女』をバレエに改編し、好評を得たことから、その後中国にバレエが流行したが、「赤軍女子連隊」はその中の１つである。

14）学习班 xuéxíbān　毛時代、共産党が問題ある党員などを法律処置なく教育する手法。その後、「双規」といって、決まった場所で決まった時間に問題ある党員などに集会させ、反省など促す。19大後は「双規」は「留置」にかわった。

15）四人帮 sìrénbāng　四人組。毛沢東を政治利用し政権取得しようとした反革命集団とされた四人のグループ。毛沢東の夫人江青氏、副主席王洪文、副総理張春橋、政治局委員姚文元。この四人組の逮捕は文化大革命の終結となった。

16）文化大革命 wénhuàdàgémìng 「無産階級文化大革命」は全称。1966年５月から1976年10月まで、毛沢東が発動し、毛沢東の死（1976年９月９日）と四人組の逮捕で終結した、内乱といわれる革命。

17）简谱 jiǎnpǔ　簡譜とは、五線譜に対して、字母や数字を用いて簡素に作った楽譜のこと。一般的に数字譜が多く利用されている。数字譜は18世紀、フランスの修道士が考案し、ルソーが『音楽新記号案』にまとめて発表した。近代、欧米音楽教育を導入した日本の音楽教育を中国に紹介し、東京音楽学校に留学した曾沢民氏が数字譜と五線譜の論文と楽譜を発表し中国に広がり、中国の工尺譜にとってかわり、現在まで中国で広く使われている便利な楽譜。

18）「薩麗哈最听毛主席的话」sàlìhāzuìtīngmáozhǔxídehuà 「サリハは毛沢東の戦士」。張世栄作詞、祝恒謙作曲の、今でも上演する中国ハザック民族の毛時代の歌。サリハとはハザック青年の呼び方。歌詩の中に金訓華という上海の知識青年が出ているが、金訓華は倒れた電柱を直すため亡くなったことで、このハザック地域では英雄とされていた。

19）映山红 yìngshānhóng　中国映画『闪闪的红星』の挿入曲。陸柱国作詞、傅庚辰作曲、鄧玉華が歌った流行曲歌。2016年度中国版歌合戦「春晩」にも登場。

原文

第七章　学　徒

1970年3月2日，我拿着常州市文工团[1]的学员录取通知书和户口、粮油关系，到团部报到。与我同时录取的还有吕雅白、高雅峰、刘亚琴、王艳丽、尚志芬、王洪海等十名学员，其中王洪海是声乐队的，我是乐队的，其余八名女学员全部是舞蹈队的。

当时的团部在石子街，说是街，其实是一条小胡同。团部看上去很破旧，以前可能是一个大户人家的住宅，大门口横着一道高高的门槛。进了大门有一个传达室，看门的老太太叫蒲娟娟，是一位无儿无女、无家无业的孤寡老人，在门房搁张床就算是家了。再进去是一个前厅，平时主要是舞蹈队练功用的；转到后面是食堂，两旁是宿舍，我被安排在食堂右边的一间宿舍里。这个阴暗的房间里面本来已经住了三个人了，现在为了我又在中间加上一张床，因为房内拥挤，所以他们并不欢迎我。但对于团领导的安排，他们也无可奈何，只得每天拿白眼瞧我。这三位“先生”和隔壁宿舍的三位“先生”，都是原沪剧团和滑稽剧团乐队的演奏员，年龄都在四十岁左右，家大多不在常州市里。平时都是以团为家的，只有在节假日时才回一趟家。不然的话，谁愿意挤在这阴暗拥挤的宿舍里睡觉呢？但我总认为他们是剧团的专业演奏员，是吃这碗饭的人，手上总该是有一套的，心里特别盼望着他们能教我几招，所以对这些“先生”们敬重有加。每天去食堂打开水，总是一手拎上两个热水瓶，一趟就把全宿舍人的开水都给打了，就连宿舍里扫地、擦桌子、倒垃圾也都由我包了。谁知道这几位“爷”[2]是从剧团里混了几十年过来的，觉得剧团的规矩就是“学徒”[3]进团，要侍候“师傅”[4]三年，所以把我的“勤劳”视作理所应当。热水瓶空了，喊一声：赵寒阳，打瓶水来。晚上吃夜宵喝酒，弄得满地花生壳、鸡骨头，叫一声：赵寒阳，明天早上起来把桌子擦擦，把地扫扫啊。

这些都还可以容忍，本来我就是一名小学员，年纪轻，有力气，干点活算啥？最不能容忍的是这些“先生”们的生活规律与我正好相反，每天我练琴的时候正是他们酣睡的时刻；而到了我睡觉的钟点却正值他们兴奋的当口。因此，我练琴就常受到他们的强烈反对。

刚开始我不懂剧团的规矩，仍然按照在家时的作息时间表生活。早晨六点半我会准时醒来，一看旁边的“先生”们还睡得正香，就轻轻地起来，洗脸刷牙，一切停当后到门外的空地上做做操，运动运动。这时候，我的那些学员同学们也都起床了，舞蹈队的女孩子们还要踢踢腿、练练功。到了七点半，大家陆陆续续地去吃早饭。我们学员第一年的待遇是包伙食和住宿，每月给四元钱零用，因此吃饭是免费的。到了八点钟，我的二胡声就准时在食堂里响起了，先是长弓、后是音阶，接着是那些枯燥的练习曲，一个小时内别想听到悦耳的音乐。第一天还没人说什么，第二天就有人受不了啦。不知是谁喊了一嗓子：

“别拉了！人家还睡觉呢。”

我一吓就不敢拉了，回宿舍看看床头的闹钟，已是上午八点多了。既然还有人要睡觉，那就等会儿再拉吧。过了半个多小时，我觉得快九点了，应该可以练了，就又接着刚才的练习曲往下练。才拉了几下，又听到一声吼：

“叫你别拉了，你怎么还拉啊！”

我心中一颤，就不敢再练了。因为自己刚进团，这些老师们得罪不起。还想着可能他们昨天睡晚了，（至于他们昨天晚上什么时候睡的，我根本不知道。）今天起不来，那就明天再练吧。

九点钟，我们学员要集中训练了。其实这是舞蹈队的事，由教练陈丽华带着学员们进行舞蹈基本训练。但我和王洪海不是舞蹈队的，要不要训练啊？团领导还专门做了研究，决定学员必须全部参加舞蹈训练。因为当时在文工团里，存在着这样一种观念：认为舞蹈演员的艺术才能最高，其次是声乐演员，器乐演员的才能最低。因此，团领导总是让学员们首先学舞蹈，学不了舞蹈的降一格去学唱歌；唱歌还学不了的再降一格去学乐器。后来我们把它编成一个笑话，在背后悄悄地流传，说：你知道团长是怎样产生的吗？原来他是学舞蹈的，因为腰弯不下来，腿抬不上去，所以就改学唱歌了；学了一阵子，又因为高音唱不上去，低音哼不下来，所以只能改学乐器了；学了一阵子，又因为快的快不上去，慢的慢不下来，所以只能去做指挥了，这样就不用自己拉琴，只需要指挥别人演奏就行了；干了一阵子，又因为起拍起不齐，收音收不净，所以只能去搞作曲了，这样就可以把想要的音乐写在纸上，让别人怎么理解就怎么奏好了；过了一阵子，又因为嘴里哼的曲调不知道怎样才能写到纸上去，只能再改行了。可是团里已经没有什么他能干的工作了，上级领导一看，怎么办呢？得！让他当个团长吧，要干什么只需动动嘴，一切都让别人去干好了。如果团长干不好，还可以往局长升嘛。

舞蹈训练的第一步是练压腿，将腿搁在训练用的扶手上，头尽可能地往下压，恨不得要使额头与脚趾相接触。第二步是练劈腿，学员坐在地上，上来两个人，把他的两条腿尽量向左右两边分，最终要求成为一条直线。光这两项，就要了我和王洪海的命了，这不是给我们上“老虎凳”[5)]吗？到底那些女孩子们筋骨软，练起来还有说有笑的，我们两个男孩子就不行了，疼得眼泪汪汪的，王洪海甚至忍不住“哎哟！哎哟！”地叫起来，惹得大家哈哈大笑。

就这样训练了一个星期，教练陈丽华也觉得我们俩“不堪造就”，就向团领导作了汇报。团长下令，从此免了我们的舞蹈训练，而改为各练各的专业。于是，每天上午九点以后就成了我法定的练琴时间，再不好听，也没人可以干涉我了。

每天下午从二点到五点是政治学习时间，各个队分别组织学习《毛选》、读报和讨论时事等等。通常是先由一个人读，其它人抽烟、喝茶、打瞌睡。到了讨论的时候，起初的发言还算切题，十几分钟后就离题十万八千里，成了自由聊天了。因为每天如此，大家也就成了惯例，没人计较了。

吃过晚饭，住在家里的人都下班回家了，住在团里的人无非是打牌、喝茶、聊天而已，我仍是抓紧时间练琴。作为一个学员，苦练专业应该受到表扬吧。嘿！恰恰相反，还惹出麻烦来了。

我们乐队有一位老师，叫屠须铭（化名），大家背地里都叫他图有虚名。此人业务上有一手，号称是一位名家的得意弟子，是文工团里的共青团支部书记，我们这些小学员在思想上都归他管。正是因为我没早没晚地整日练琴，特别招人烦，就有人窜逗他出来管一管，说赵寒阳成名成家思想严重，有走白专道路的倾向。而这位屠老师本来就是一位崇尚“与人斗，其乐无穷”的人，一听群众有此反映，正好抓个典型，以示其政绩。于是，就召集学员班开会，要求大家注意阶级斗争的新动向，要与走白专[6]道路的思想作坚决的斗争。这一次还算给面子，没有公开点我的名。

其实我应该管这位屠老师叫师叔的，因为当时常州有四位青年人，年轻潇洒，文才出众，经常聚在一起下棋论乐，指点风云，号称常州四才子，刘逸安老师和这位屠须铭都是其中的一员。既然我是刘逸安的弟子，作为四才子中老三的屠须铭，难道不该对我照应三分吗？可他为了表现出自己的政绩，给以后的高升积累一点资本，朋友的情面也就顾不得那么多了。

这一天，屠须铭特地找到刘逸安老师，说：你有一个弟子叫赵寒阳，在我们团里当学员，是不是？刘老师觉得这个朋友够意思，知道赵寒阳是我的学生，还专门来打声招呼，忙笑着说：是，是，还望你多多关照。不料这位屠须铭却严厉地说：这个赵寒阳在团里只要二胡两根弦，不要阶级斗争一条线，走白专道路，我们是要批判的，而且要挖根源、揪后台。我知道，他的后台是你，所以你要注意点。如果你不立即改正错误，无产阶级是要对你实行专政的。一席话，把刘老师气得脸色铁青，冲着他的鼻子说：屠须铭，我怎么交上你这么一个朋友。赵寒阳为革命苦练基本功，有什么错。你们文工团艺术水平上不去，拿什么来为人民服务。我们这么多年朋友，即使赵寒阳有什么不对之处，你看在我的面上，也要帮他一把，况且他又没犯错误。赵寒阳进团前就是我的学生，现在我一不图名，二不图利，义务给你们团培养接班人，你还说什么我是后台，还要对我实行无产阶级专政。你真是狗嘴里吐不出象牙来，你倒来试试看！当场就把屠须铭骂得无言以对，只是呐呐地说：好，你等着，你等着。

从此，刘逸安与屠须铭就断绝了往来。想想都是为了我，使堂堂常州四才子反目，以致少了多少风花雪月、琴棋书画啊！

事情当然不会就这样完结。第二天晚饭后，屠须铭召集了第二次学员班开会。除了我们十名学员外，还有舞蹈教练陈丽华。屠须铭板着脸，代表共青团支部主持会议，先背诵了一段毛主席语录：

“伟大领袖毛主席教导我们说，千万不要忘记阶级斗争。”说着，把手往空中挥了一下，似乎在模仿领袖的动作，可惜不太象。他接着说：

“阶级斗争就在我们的身边啊。现在社会上有一些不务正业的人，在和我们争夺下一代，给

我们的学员灌输成名成家的资产阶级思想，鼓励我们的学员走白专道路。你们说，我们要不要和他们进行斗争啊？”

学员们互相看了看，都不敢说话。屠须铭又喝令道：

“赵寒阳，你站起来！”

我浑身颤了一下，站起身来，低着头，谁也不敢看。在当时那种政治白色恐怖的环境下，心里确实是很害怕的。只听屠须铭接着说：

“你现在是一名无产阶级的文艺战士了，为什么还在社会上找一些不务正业的人学什么琴，你知道他是什么出身吗？你对他了解吗？团里这么多老师，都可以教你嘛。你对‘只要二胡两根弦，不要阶级斗争一条线’的这种行为要好好地进行自我批判，一定要肃清成名成家的资产阶级思想，我们要的是又红又专的无产阶级革命战士，决不要那种走白专道路的什么艺术尖子。最近一段时间，你要好好反省，作深刻的认识。”屠须铭说着转过脸来，又对其它的学员们说：

“从今天起，我们要成立一个帮教小组，来挽救一个濒临深渊的同志。这样吧，这个帮教小组由尚志芬同学来负责。散会！”

人们逐渐地散去，只剩下我一个人仍站在原地，眼泪扑簌簌地往下掉，心里那种委屈、害怕、愤恨、不知所措等复杂的心情交织在一起，象一团乱麻，剪不断，理还乱。我这样不知站了多久，直至有一个人走过来，轻轻地说：赵寒阳，没什么，只要在思想上好好认识，你还是一个好同志。别在这儿站着了，去休息吧。我抬头一看，是舞蹈教练陈丽华。我仿佛看到了亲人似的，哽咽地说：陈老师，我没想成名成家，也没走白专道路。我就是想把琴拉得好一些，这也是提高为人民服务的本领啊。

“好了，今天我们不说了，你也好好想想，要挖掘深刻的思想根源，赶快去休息吧。”陈丽华和蔼地说。

从此，每天晚上七点钟到八点半，都是我帮教小组开会的时间。由尚志芬负责，先是学习毛主席著作，从“老三篇”《为人民服务》、《纪念白求恩》、《愚公移山》开始，再读《湖南农民运动考察报告》、《关于纠正党内的错误思想》、《青年运动的方向》、《反对自由主义》等等，直至《实践论》、《矛盾论》这样的哲学著作。然后大家发言，对我“成名成家”、“走白专道路”的资产阶级思想进行批判。几乎在所有人的发言中，都说到“我们批判的是这种资产阶级的思想，不是对赵寒阳个人；”或“让我们共勉，共同警惕资产阶级思想的侵蚀”等等，使我感受到了他们那种被迫的感觉，和同学们之间的深切友谊。从开会的气氛和大家的发言来看，这似乎是人民内部矛盾，而不是敌我矛盾，这让我放心了不少。于是，我也认真地学习毛主席著作，认真地听大家发言，认真地做好笔记，并写了一份长达十几页的思想汇报。

经过了半个月的帮教学习，这天下午团里开了一个全团大会，市文化局的领导都来了。会上由我做了全面的检讨，说：自己学习毛泽东思想不够，阶级斗争的观念不强，思想比较单纯，只

想把二胡拉好，增强为人民服务的本领，没有主动抵制资产阶级思想的侵蚀，险些走上了白专的道路。是党和人民挽救了我，尤其要感谢屠须铭老师，是他及时地发现了这个阶级斗争的新动向，在我的背后猛击了一掌，把我唤醒了。还要感谢帮教小组对我的错误思想进行批判和教育，使我进一步认识到自己已经面临着危险的深渊。今后我一定要多读毛主席的书，凡事要以阶级斗争为纲，做一个又红又专的无产阶级革命文艺战士，等等。说着，还向屠须铭和帮教小组的同学们分别鞠了一躬，以示感激之情。我的检讨态度诚恳，检查深刻，就差痛哭流涕、痛不欲生了。接着尚志芬代表帮教小组总结了这十几天来学习的收获，说通过学习，大家的思想水平有了很大的提高，清楚地看到了阶级斗争的复杂性和尖锐性。从今天起，我们将帮教小组变成毛主席著作学习小组，永远学下去。在大家的掌声之后，屠须铭代表共青团组织发言，讲了如何以敏锐的眼光发现阶级斗争的新动向，如何以饱满的无产阶级感情挽救一个同志，云云。最后，市文化局领导作指示，充分肯定了这次“十分有效”的帮教工作，还让我们进一步总结经验，并在市文化系统中作全面的推广。因为屠须铭同志突出的政治表现，特任命为常州市文工团革命委员会成员，以加强团的领导工作。

过了几天，市文化局还真的召开了全文化系统的职工大会，让我们这个“帮教小组”在会上作经验介绍。当然，我在其中仍充当了被挽救了的“白专”典型角色，当着全文化系统职工的面，再次作深刻的思想检讨，真是露足了“脸”、出透了“名”。要不是因为团里接受了演出任务，对我的“帮教”工作恐怕还要继续地进行下去。屠须铭因此事而飞黄腾达、春风得意，从此对待我们学员更是严厉有加。那个年代青年人的思想都要求进步，总是将入团看作是政治上的第二次生命。但谁要是得不到屠须铭的青睐，要想入团，势比登天。这位屠老师在忘乎所以地得意了几年之后，终于惹出风流韵事来，最后落了个撤职检查、威风扫地，至今未得翻身的结果。

有一位哲人说过：上帝造就一个人的方法有许多种，让你经受挫折，经历磨难，使你坚强，增加智慧，是其中的一种；上帝毁灭一个人的方法也有许多种，让你平步青云，一夜暴发，使你贪婪，得意忘形，亦是其中的一种。在许多年以后，当我于一本书上看到这段文字时，心中那往日的不平瞬间烟消云散了，甚至有些感激屠须铭当时对我的过分之举，原来这是上帝以毁灭一个人的代价在造就我啊！

常州市文工团成立后排的第一个戏是革命歌舞剧《农奴戟》，这是从山东省歌舞团学来的剧目。该剧讲述了1927年，在江西的一个小山村里，共产党员张铁匠从湖南带来了革命的火种，团结广大深受“三座大山”压迫的贫雇农，与大恶霸地主作斗争，最后踏上井冈山的故事。这是当时革命剧的一个套路，故事情节大同小异。但文工团终于要正式排戏了，全团上下还是非常兴奋的。

剧本拿回来了，是那种油印[7]的小册子。舞美队有一位老师傅，能刻一手漂亮的钢板字，他

开了好几个夜车，把剧本全部刻在了蜡纸上。这是当年最流行的印刷方式：在薄薄的蜡纸下面垫上一块专用的钢板，再用铁笔在上面写字，然后放到油印机上去印，经过装订就成了一本一本的资料了。印刷的过程很辛苦，又很脏，于是团里就把这个任务交给了乐队。

那天吃过晚饭，我们在队长徐正荣的带领下，开起了“印刷厂”。在练功厅里架起两张乒乓桌，将油印机放上去。我第一次看到这种筒陋的油印机，这哪称得上是“机”啊，就是一个木箱子，打开后有一个张着丝网的木框，还有一个带手柄的滚筒。印的时候，将刻好的蜡纸张在丝网上，在下面的大夹子上夹上纸张，右手持蘸了油墨的滚筒，自下而上在蜡纸上推过，就算印好一页。刻好的蜡纸拿来了，足足一筒多，有五十多张；纸搬来了，好几大捆，每张蜡纸印六十份，共需纸三千多张。这可是个力气活，手上不使点劲还印不清楚，而要这样推三千张，恐怕张飞来了都不行。因此，需要几个人换着干，其它人装纸、加墨、折纸、装订，忙得不亦乐乎。

时间很快就过了十一点，而蜡纸才印完十几张。因为我自小睡觉从未超过十点钟，根本没有见过半夜零点的天是什么样。尽管我困得哈欠连天，但不敢问，看看大家丝毫没有收工的迹象，只得忍着。快到十二点了，我实在忍不住，就悄悄地问身旁的张昌生：张老师，今天我们要干到几点啊？张昌生是我们乐队里拉中胡的演奏员，从原常州市沪剧团合并而来的，是一个和蔼可亲的老头儿。他手上一边忙着，一边说：你这小子没开过夜车啊？今天这活不干到明早八点可完不了，以后通宵大战的事可多着呢。我伸了一下舌头，没敢再说什么。从此明白了人在夜里，居然还可以不睡觉，通宵干活的。

这活儿果真一直干到第二天早上八点多钟，六十本装订好的剧本终于整整齐齐地堆放在乒乓桌的一角。再看满地是废弃的纸张，人们满手是蓝色的油墨，脸上也是花一道、黑一道的，连鼻孔中也尽是白白的纸粉。

舞蹈队的女孩子们都起床了，看到我们弄得象鬼一样的脸，都忍不住笑了。徐正荣队长说：你们还笑呢，没看到我们多辛苦吗？快来帮着收拾收拾呀。教练陈丽华也招呼舞蹈队的学员们：同学们快过来，帮着把练功厅收拾干净，一会儿我们还要练功呢。又对我们说：你们辛苦了，去休息吧，这儿交给我们了。于是，徐正荣和张昌生两人抱着印好的剧本去团长办公室交差，我们就洗洗脸，吃了点咸菜就稀饭，上床睡觉去了。

由于石子街的这个团部太小，要排戏实在活动不开。因此，在1970年的6月份，常州市文工团就搬到天宁寺附近原沪剧团的团部去了。这是一个比较宽大的院落，里面有一座两层的转盘楼，大大小小总共有六七十间房间。原先这里是中国十大佛教圣地天宁寺的香客楼，是一座有着多年历史的木结构建筑。

到了新团部，我们乐队也有了一个大房间做排练室。当音乐总谱拿来后，却发现现有的乐队根本达不到所需的要求。乐队在编的十几个人，除了我以外，都是从原沪剧团和滑稽剧团合并而

来的戏曲伴奏人员。没有指挥，乐器不全，演奏水平参差不齐，有些人还不识谱。于是又到其它单位借调了一批人员，充实到乐队之中，才使总谱的要求基本上得以满足。当时的乐队指挥是盛易新老师，是一位瘦瘦的、从文化局借调而来的资深音乐家。其实这部戏的音乐并不难奏，但排练还真费了些功夫。因为在戏曲伴奏时，只要主胡一带，其它人往上一和，差不多就行了。而现在却是写好的总谱，各个声部横向是旋律，纵向是织体，错开一点儿都不行。盛指挥是边讲乐理，边打拍子；边排练曲目，边训练乐队，加上他身体本来就不太好，直累得满头大汗，吁吁带喘。有些老先生谱子不明白，又不敢问指挥，就悄悄地求助于我。说实在的，我也是现买现卖，不过是反应比他们快些罢了，但这也足以使他们不再小瞧我了。

其实排戏是件很好玩的事情，别说演员对台词、排动作好玩；也别说舞美队钉架子、画布景好玩，最好玩的是道具组做道具。不论是大门口的石狮子，还是熊熊燃烧的炭火盆，都是先用竹篾子扎出架子，再用布糊成造型，然后将废报纸泡成的纸浆堆出细节，等干了以后再涂上颜色，就成了以假乱真的道具了。有些道具中还暗藏着机关，观众看上去就象真的一样，直为演员捏把汗。

还有更好玩的，就是那些道具枪。长的是拉一下枪栓打一枪的老式步枪，短的是抗战电影中汉奸背的木盒子驳壳枪，都是从舞台道具商店买来的，非但做得十分逼真，而且还可以打火药纸，比玩具枪可好玩多了。当年团里管理道具的大爷叫冯群，我没事总爱“泡”在他那儿，弄弄那个刀，玩玩这个枪。因为在演出时需要枪声效果，是将那种发令枪用的大个儿火药纸，夹在专门的铁夹子中敲出来的。当然这种火药纸是有专人保管的，轻易弄不到手。我常常在演出前，主动地帮管效果的朱超往铁夹子里装火药纸，偷偷地就藏下十几粒，再到后台向冯大爷借把枪，拿到剧场后门外去放。

经过两个月的紧张排练，这部革命歌舞剧《农奴戟》就要向党的生日献礼了，演出地点是在人民公园对面的常州剧院。剧院门口的大广告画出来了，《常州日报》也刊登了演出的消息。尤其这是常州市文工团成立后的首场演出，引起了广大市民们的极大兴趣。票价是：四角、六角、八角，对于当时人均工资只有三十多元的情况下，买票看戏已是奢侈之举了。尽管如此，首轮十五场演出的票还是早早地就被预订一空了。正式公演前的彩排，除了邀请市委和文化局领导前来审查节目外，还给我们每人发了两张票。那时候谁能弄到演出或电影的赠票，是非常荣幸、值得炫耀的事。为此，父亲和奶奶都非常高兴，逢人就说：我们家小君的团里明天要在常州剧院演出了，发了两张票。这不，明天要早早地吃了晚饭去看戏呢。惹得隔壁邻居羡慕地说：哟，瞧你们家小君多有出息啊，不象我们家小伟，整天只会在厂里干活，连张电影票都弄不到。下次请你们家小君也给我们弄两张票，我们也去见识见识。

“小君他们团里也不常发票，这也是第一次啊。以后有多了票，我一定请你去看。”奶奶喜笑颜开地回答道。

彩排演出如期举行，演员们因为要化装，所以下午五点钟就到剧场了，我们乐队是六点半在后台集合。队长、指挥先给乐队队员们训训话，讲讲注意事项。大家都很兴奋，情绪高昂地表示一定尽最大的努力把音乐演奏好。接着全体乐队人员从舞台侧面的地道中进入乐池定音，检查乐谱。乐池大约有二米多深，一色的新谱架，是专为这个戏购置的。每个谱架上夹着一个低电压的谱灯，以便在暗场时演奏员能看到乐谱。因为地上拉着许多电线，所以走起路来要十分小心。演奏员进入乐池后是看不到舞台的，只有指挥坐在高高的指挥台上，可以看到舞台上演出的情况。为此我一直很羡慕指挥，能天天坐在高台上看戏。这和我小时候羡慕公共汽车的售票员，能天天不化钱就坐公共汽车逛街，还可以拿工资一样，完全是一种儿童的幼稚心理。

演出非常成功，因为所有的演职人员都是思想集中、竭尽全力地在工作。大家都把演出看成是完成一项艰巨而光荣的政治任务，其工作的认真程度是现在的文艺团体望尘莫及的。演出结束后，照例是领导上台接见、照相，但能与领导握手的只是剧中的几个英雄人物，扮演反面角色的演员是不能参加领导接见的。当然，后台的工作人员，包括我们乐队，也只能在旁边看看热闹。

父亲和奶奶特意走到乐池边和我打招呼，我也向指挥盛老师作了介绍。盛老师还对父亲和奶奶说：哦，赵寒阳挺聪明的，二胡拉得不错，在乐队里表现也挺好的。父亲和奶奶客气地说：全靠老师们的培养啊，今后希望领导多严格要求他。

演出结束后，每个队都要分头开总结会，有谁在演出中出了错，都要进行批评与自我批评。所以大家在演出中都非常认真，免得出了纰漏在总结会上出丑。虽然当时文工团的艺术水平并不算太高，但就是因为大家思想的革命性，和一些看起来是程式化的措施，使演出的质量得到了最大的保证。

因为我们学员规定要住团[8)]，等舞蹈队的那些女孩子们卸完装，同学们一起说说笑笑地往团部走。经过路口的面店时，大家不约而同地进去吃宵夜。那时候我们演出一场发二两粮票[9)]和二角钱的夜宵费，可我总是舍不得全部吃掉，一般都是吃八分钱一碗的阳春面，最多吃一角二分一碗的雪菜肉丝面或锅贴，心中已经非常满足了。自从我1970年进团当学员后，就再也没向父亲要过生活费。为此我心里感到很是自豪，因为我可以养活自己，成为一个自食其力的劳动者了。

革命歌舞剧《农奴戟》在常州剧院足足演出了一个月，场场暴满，出色地完成了上级领导交给我们的任务。团里召开总结大会，文化局的领导也到会祝贺演出成功，团长宣布全团放假十天，好好休整，准备迎接下一步更艰巨的任务。

就在我归心似箭地准备回家休假的时候，屠须铭却把我叫到了他的办公室。说实在的，我最害怕的事情就是这位屠老师找我谈话，但又不能不去，只得硬着头皮走进团支部办公室。

屠须铭坐在一张藤圈椅中，左腿悠闲地架在右腿上面，见我进来，说了声：坐下吧。我在旁边的椅子上坐下，心“突突突”地直跳，不知又有什么大祸临头。只听屠须铭问道：最近思想提高得怎么样？我呐呐地回答道：嗯—，我一直在努力地学习，天天读毛主席的著作，也没有犯错

误。

“是啊，我也觉得你还是有进步的嘛。现在党有一项光荣的任务要交给你，这也是对你的严峻考验，你能不能完成？”屠须铭严肃地说着，完全是首长对下级下命令时的口气。

“能！我一定完成党交给我的光荣任务。”我嘴上说得很是坚定，可心里在想，你让我干啥，我能说半个不字吗？

“好！目前党中央号召全国人民开展深挖5.16反革命集团的政治运动，我们团里也有5.16反革命分子，经常州市文工团革委会研究，决定让你参加深挖5.16学习班。”屠须铭声音虽然不大，可把我吓坏了。我一下子站起来说：

“屠老师，我不知道什么是5.16，怎么就成了反革命分子了呢？我可没有反革命啊！”

屠须铭摆了摆手，示意我坐下，说：

“你别紧张，没说你是5.16反革命分子。而且正是由于你出身好，苗子正，也是为了进一步地对你进行教育挽救，才将你派到阶级斗争的第一线去接受锻炼的。你去学习班，要与阶级敌人进行坚决的斗争，一定要立场坚定，遵守纪律。你去准备一下，一会儿就走。”

这个全国深挖5.16反革命集团的运动本是“四人帮”为了篡党夺权而策划的一场政治阴谋，是我国历史上最大的冤假错案。但在当时那种白色恐怖的政治环境下，确实弄得人人自危，一不小心就会被扣上一顶什么“帽子”，然后“打翻在地，再踏上一只脚，叫你永世不得翻身。”

这个“深挖‘5.16’学习班”，设在麻巷常州市第三人民医院中的一个小院内。常州市第三人民医院本是一所传染病医院，这个小院更是一处“闲人莫入”的神秘所在。所关押的“5.16”分子是原沪剧团的一名编导，是个老“运动员”了，从一生下来，就没有“选择”好出身，在以后历次的运动中，又都是管制对象，这一次仍然没有逃脱厄运，被关进了学习班。因为我不便公开他的名字，在本书中我就称他为老五吧。

说是学习班，实则是对所谓的“5.16”分子进行人生迫害、严刑逼供的刑讯室。进入此地，不但这个老五没有自由，就连我们这些看管他的人，也被告知“三不准”，即：不准外出；不准与家人联系；不准进行任何与阶级斗争无关的业务活动，整个学习班呈保密和封闭状态。

学习班除了被看管的这位老五以外，还有三名审讯人员和四名看管人员，采取轮班值守制。审讯人员由团革委会的成员担任，屠须铭也是其中的一位，一般都是白天来上班，下了班就回家；看管人员是从团里抽调出来的出身好、年纪轻，没有参加过“文化大革命”的同志担任，我算是其中之一。看管人员两个人一班，分日夜两班，但下了班也不准出去。小院中有四间房，一间是老五的囚室，一间是审讯人员的休息室，还有两间是我们看管人员的宿舍。一切生活用品都是由医院住院部提供的，包括被褥、床单等，均印有“常州市第三人民医院”的字样。那时我年纪小，不懂得病床腻歪，再说也不敢提什么要求。我们的任务是对老五实行看管，有情况及时报告。此外，老五生活上的一切需要，也都是我们的工作，如：打饭、打水[10]、倒尿盆[11]；还要监

督他遵守作息时间，叫他起床，等等。

学习班把这个老五关押在这儿做什么呢？要达到什么目的呢？就是让他交代还有谁是“5.16”分子，只要他说出一个名字来，这个人马上就会被隔离审查。就有学习班中的一个审讯人员，突然就被换走了。后来才听说，就是因为他的名字也被这个老五扯上了，第二天就被隔离审查了。好在我们这四位看管人员根红苗正，没有参加过“文化大革命”，好像具备了天生的“免疫力”，否则也是要睡不好觉的。

在老五的囚室中，仅有一张床，一张桌子，一支钢笔，一叠纸。连凳子都没有一张，就怕他会举起来砸人。吃一顿饭给半个小时时间，每天只允许他从早晨五点到七点睡两个小时的觉，其余的时间除了审讯以外，勒令他不停地写交代材料。写过一遍再写一遍，十几遍二十几遍地写，然后审讯人员反复地对照每一遍所写的交代材料，有什么不同之处，挑出来对其进行审讯。到后来，这个老五就将几十页的交代材料背得一字不差，不管写多少遍，连一个字都不错。而且他还将写交代当作练字的好机会，认认真真地、一丝不苟地写；一笔一划地、不紧不慢地写，写出来的交代材料简直可以当字帖，那字真叫一个漂亮。每到吃饭的时候，我们总是两个人先去食堂吃饭，然后把他的饭带回来。每次只有三两米饭，一份青菜。尽管他的工资全部由审讯人员代为保管，也从不给他买荤菜，这是规定，是“对敌人不能温良恭简让”。打饭的人回来后再替换两个人去吃饭，纪律规定学习班内不得少于两名看管人员，就怕老五将看管人员打昏后逃跑。平时我们闲着无事，就把他的人事档案和所写的交代材料当小说看。按理说，一个人的人事档案是重要的文件，应当妥善保管在专门的部门，不是谁都能看的。可当时他的档案就扔在桌上，审讯人员还叫我们都看看，以便更加认清阶级敌人的真面目。此人的档案真是复杂，足有一寸多厚。记载着在历次运动中被审查的情况，还有他自己写的各种交代材料。当时我们看了，都觉得他不是好人，是罪有应得。但去囚室时看到他那种可怜的样子，又觉得这样对他未免有些残忍，又怕他会突然跳起来打倒我们，因此不敢贸然进去。

时间就这样一天天地在无聊中渡过，而长期摸不到二胡是我最难受的。于是有一天吃过晚饭，不是我的班，我就试探着对另外三名看管说，能不能让我出去一趟，回团里拿点东西。因为这么多天来从未发生过什么意外，大家的警惕性已经没有那么高了，他们就答应了，说：你去吧，快去快回啊。我象得了特赦令似的，飞快地跑出医院，直奔汤锦慧家而去。从医院到她家，散步只需五分钟，跑步仅要二分钟。到了锦慧家，她和弟弟锦亮，以及她爸爸、妈妈都在家，见我去，很是高兴，就问我最近怎么样？为什么好久也不来玩？我把近况简要地说了一下，讲了今天来是想在这里拉会儿琴，因为我已经有一个月摸不到二胡了。于是，锦亮把他的二胡递了过来，我几乎象犯了烟瘾的人接过一支香烟似的拿起来就拉，真是过瘾啊！

拉了一会儿，不敢多担搁，匆匆地告别了锦慧一家，跑步回医院报到，但一切都晚了！也不知事情怎么那么凑巧，平日里晚上审讯人员一般都不来，恰恰这天晚上屠须铭却来了，一看我不

在，就问赵寒阳去哪儿了？有人告诉他，赵寒阳回团里拿些东西，马上就回来的。屠须铭一听就说：这是违反纪律的，我在这里等他。当我回来一踏进门，发现屠须铭坐在那儿，脑子里就“嗡”了一下，知道事情不妙。没办法，只得战战兢兢地走过来，叫了一声：“屠老师。”一听就知道底气不足。

“你去哪儿啦？”这不，对我的审讯开始了。

“我，我，我去团里一趟。”我呐呐地回答。

“去团里干什么？”

“去拿东西。”

“拿了什么东西？”

坏了，我明明是两手空空地回来的，拿什么东西啊？

“我、我、没拿什么东西。”

“那你去干什么了？老实说！”屠须铭态度严厉起来。

“我、我就是、我就是去了一个朋友家，拉了一会儿琴。”我只得招供了。

“好哇！在这样尖锐的阶级斗争面前，你还离开战斗岗位去拉琴，看来你的思想仍然没有转变啊。给我好好地写份检查，认真地挖挖思想根源。”屠须铭说着，又对另外三位看管人员说：

“你们也要遵守纪律，不得任意出入，特别是看好这个赵寒阳，不可让他再出去，还要在思想上多帮助他。”

这三位也是吓得大气不敢出，一个劲“是！是！是！”地答应着，毕竟这是阶级斗争的前线，而屠须铭又是革委会的当红人物，一旦给你扣上一个“思想不革命，立场不坚定，路线不分明，斗争不得力”等等的罪名，可不是闹着玩的。

等他走后，这几位都过来安慰我，叫我认真地写份检查，他们也会帮我说说好话的，证明我在学习班中工作很努力，阶级斗争观念很强，争取得到屠须铭的原谅，事情就可以过去了。我听后心中稍稍平静了些，反正睡觉还早，就开始写检查吧。

只过了一天，我的检查还没有来得及交上去，学习班就出了一件大事，以致我离岗的问题就显得微不足道，而不了了之了。

这个老五在被关押期间，受尽了人生的折磨。在审讯时肚子上挨一脚，蹲在那里半天起不来；或者脸上挨一耳光，鲜血立马顺着嘴角淌下来等等，是司空见惯的事。我看了心中也实在觉得不忍，但哪敢出声啊。这可是无产阶级的立场问题，况且自己还在被“教育挽救”的阶段。但最使他受不了的，是不让他睡觉。你想每天早上五点才让他上床睡觉，一到七点钟就把他从床上拖起来，睡眠不足白天当然要打瞌睡。但审讯人员一会儿就去监督一次，发现他趴在桌上打瞌睡，立即过去将桌子猛地一拍，将其震醒。过了一会儿，又发现他趴在桌上打瞌睡，走过去将他头发一把抓起，脸上立刻挨了两巴掌。一天二天还熬得过，一个多月下来，这人就快要疯了。可

能他觉得如果这样下去，就非死在这儿不可。于是在那天半夜里，趁着看管人员一个不在意，居然从一人多高的后窗跳了出去。当值班的阿寿去囚室例行检查时，推门一看人没了，后窗开着，知道不好，大喊了一声：

“快起来！5.16分子跑了！”说着就追出门去。

这个小院都是平房，不算太高。阿寿跑到门外，发现房顶上有个黑影，看样子是想越过围墙逃出医院去。幸亏阿寿是个二十多岁的小伙子，学舞蹈的，身强力壮。当时也是一股激劲，脚一蹬，手一够，翻身上了房，就在房顶上展开了一场殊死的搏斗。

我们听到喊声，都立刻披上衣服跑到门外。正巧前几天因为修房，还有一架梯子靠在围墙上，大家七手八脚地忙着去搬梯子。老五把心一横，反正被抓下去也是死，不如和你拼了吧！所以不要命地与阿寿搏斗。事到此时，可真是一场你死我活的阶级斗争了。

两个人在房上扭抱在一起，老五心想：我就抱着你往房下摔，摔死了我，我省得受罪，摔死了你，我够本。于是，脚往屋脊上一蹬，两个人就顺着屋面的坡向下滚了。真要是摔下来，先着地的那个人定是非死即伤。当两人滚到房檐处，阿寿用脚死死地抵住了雨水槽，才没有掉下来。这时，又有两个小伙子架上梯子爬上房去，几拳就打得老五失去了反抗能力，被大家揪了下来。

一进囚室，有人搬来一张椅子，找了根绳子把老五结结实实地捆在椅子上，大家这才松了口气。一看阿寿，衣服也撕破了，脸上手上都擦伤了，还流着血。我们都对阿寿大无畏的革命精神敬佩得五体投地，纷纷地帮着他换衣服、清洗伤口，有人立即跑去前院拿来药品给他敷上，一直忙到天亮。

说实在的，那天的事是阿寿救了我们几位。如果让老五跑掉了，或摔下来摔死了，或在搏斗中把阿寿摔死了，我们几个人的责任可就太大了，就要“吃不了兜着走”了。因此，大家都从心底里感激阿寿，把他当成大哥一样敬着。

因为当时电话还不普及，审讯人员是上午来了以后才知道这件事的。除了对老五进行更为严厉的审讯以外，文工团革委会对阿寿的英勇行为进行了表彰，党支部立刻发展阿寿火线入党。

我依旧在学习班里尽着自己的职责，平静地渡过了半个多月，谁知惊心动魄的事件再次发生了。

这是一个风高雨急的夜晚，因不是我的班，所以早已进入梦乡多时了。值班的阿青去老五的囚室例行检查，一推门只见桌前没人，床上也没人，莫非又跑了？急得阿青一声喊：

“大家快起来，5.16分子又跑了！”说着就向屋外冲了出去。

我们闻讯马上起来，抓了件衣服就跟着跑到屋外。外面下着雨，静悄悄地，一点动静都没有。看看房顶上没有人影，再回头瞧了一眼囚室的窗户，关得好好的，并没有打开。大家就琢磨，这个家伙会不会藏在门背后，等有人进去就袭击我们？于是，又都跑回来，看看囚室的门半开半掩着，阿青就过去使劲地一推门，心想这家伙如果躲在门后，就先将他挤住。结果门沉沉

的，也推不到全开，分明门后垫着个东西。阿青喊道：

“我推着门，大家进去看！”

我们进了囚室，每人都高度戒备地准备与阶级敌人展开搏斗。阿寿一眼就看见门背后藏着个人，就大喝一声：“出来！”

这人动也不动，阿寿又喝了一声：“快出来，你不要自绝于人民！”

这人还是不动，大家就觉得有些蹊跷。阿寿说：“阿青别推门，快进来。”

阿青手一放，门就松开了。大家这才发现，老五用一条围巾，挂在门后一根用来拉铁丝晾毛巾的大钉子上自尽了。这种事情谁见过？把大家吓得“妈呀！”一声呆若木鸡，不知如何是好。还是阿寿见过世面，头脑比较清醒，上去一把就将老五抱住向上一托，喊道：“快！快给他解开。”

阿青胆子大，上去把围巾解开，帮着阿寿将老五抱到床上。好在这就在医院里，有人已经跑去叫医生了。只见几分钟后，四五个穿着白大褂的大夫推着氧气瓶等就进来了。因为发现得早，吊的时间还短；再说围巾也比较粗，所以还有一口气，但人已经失去了知觉。医生忙着给老五打了强心针，又接上了氧气，并给他做人工呼吸。就这样，抢救到天亮，老五才终于捡回了一条命。

往后的七天里，老五一直处于昏迷状态，嘴里吐着白沫，靠静脉滴注葡萄糖维持生命，整个囚室里腥臭无比。反正不怕老五跑了，也不用我们送饭了，而且有医生每两小时来查一次房，因此我不到万不得已不敢走进囚室一步。我没能看到他苏醒的那天，因为调我的“特赦令”下来了。

常州市文工团自从七月份成功排演了革命歌舞剧《农奴戟》[12)]后，得到了市委和文化局领导们的充分肯定。当时正值中央号召大力普及革命样板戏，因此上级决定把排演革命现代芭蕾舞剧《红色娘子军》的光荣任务交给文工团，要求在春节期间向全市人民献礼。

样板戏，样板戏，就是必须根据样板来演出的戏，各个方面都要达到样板团的编制和要求。其它方面还好说，唯独乐队是个大难题。一是人员不足，在编的十几名队员根本满足不了样板戏乐队编制的要求；二是乐器不全，原先的乐队只是一个小型的民乐队，而演样板戏起码需要一个单管制的西洋管弦乐队。因此，团领导决定将乐队分散在外的人员一律调回，再向总工会的一个业余管弦乐团短期借调一批人员来团工作，全力完成排演革命样板戏《红色娘子军》[13)]的光荣任务。一纸调令下到学习班[14)]，我被“刑满释放”了。

我回到家里，父亲和奶奶都快不认识我了。因为在学习班的两个多月中，没理过发，没洗过澡，没换过衣服，真象是刚从监狱里放出来的一样。奶奶那心疼的样子我至今历历在目，她含着泪一个劲地唠叨着：你看看，怎么弄成这个样子。早知道这样，我们就不去文工团了。我赶紧安慰奶奶，说：哎呀，没什么，你看我不是好好的吗？但此时我心中的波澜却久久不能平息，一会

儿想自己是不是被团里打入了“另册”，不知以后屠须铭还会怎样来整治我；一会儿又想排样板戏听说要西洋乐队，我能做什么呢？甚至还想到学习班里的老五，我走的时候他还没醒过来，不知还能不能醒过来等等，胡思乱想了一天。后来听说这位老五醒来后在学习班又审查了一个阶段，就被遣返回老家了。在粉碎“四人帮”[15]、结束“文化大革命”[16]后的1978年，团里开大会为他彻底平反，洗清了多年的冤狱，并回团工作，此时我已经离开常州市文工团到北京上学了。可巧的是，有一次暑假期间，我回常州度假，到文工团（当时已改为歌舞团）还见过他。我一眼就认出他来，心想：哟！这不是那位老五吗？多年不见，还是那样子没变啊。他可能没有认出我来，还问旁边的人，这是谁？旁边人告诉他，这是赵寒阳，原来是我们团的，现在考上了北京的大学，上学去了，等等。他“哦”了一声，没多说什么。这是我从学习班出来后唯一再见过他的一次，此乃后话。

排演革命样板戏《红色娘子军》对文工团的乐队来说，是一场脱胎换骨的大革命。首先是每人都必须学会一件西洋乐器，第二是一律要看五线谱。当团领导让我在圆号和大提琴中做出选择时，我毫不犹豫地选择了后者。于是，乐器室就发给了我一把大提琴，是上海产的。但要学会怎样拉，就要自己想办法了。我到处托人，终于借到一本《弦乐器演奏法》的书。这是一本综合介绍小提琴、中提琴、大提琴和低音提琴演奏入门的普及读物，图文并茂，通俗易懂。我如获至宝，化了两天时间，将书中大提琴的部分全部抄录一遍，连十几张图也用描图纸给描了下来。然后依样画葫芦，只用了一个星期，就将音阶摸熟了。好在过去我自学过一点五线谱的知识，此时可派上大用场了。看看那些拉了一辈子戏曲的老先生们也真可怜，本来连简谱[17]都看不利索，现在要看那密密麻麻的“小蝌蚪”，就如同我们看几千年前的甲骨文一般。可这是对革命样板戏的态度问题，谁敢说一句“我学不会，我不干了。”因此，也都拿着一件西洋乐器，戴上老花镜，一点儿一点儿地啃。一时间，团部热闹非凡，乐声不断，虽不悦耳，但士气却十分地高涨。

总工会业余管弦乐团的同志们来了，在他们中间还真有原先在乐团或军乐团中呆过的人，拿起这个管、那个号溜了几下，就把我们给“震”住了。“好好学吧。”我在心里对自己说。

《红色娘子军》这个戏，我们是跟无锡市歌舞团学的。团里一声令下，各队选拔精兵强将，奔赴无锡学戏。乐队组织了一个抄谱组，有庄天才、骆怀民和我等六个人，就在无锡市歌舞团招待所的一个房间里，摆开了抄写总谱的战场。当我们看到摆在桌上的总谱差不多有二寸厚，而限期却只有五天时，大家都感到头皮直发麻。

说干就干吧，每人在桌上或在床板上开辟出一个阵地后，拿起铅笔、直尺就大战开了。这个活还真不好干，我虽然学过一点五线谱的知识，但还不太熟练，尤其是从未见过如此复杂的总谱。刚开始的时候，是数着线抄的，这样抄写的速度就大大降低了。但一天以后，我的抄谱技艺就已经与大家不相上下了。几天以后，我抄谱的速度和质量都名列榜首了。可谁知团里从此将我定为乐队的抄谱员，每次排新戏，总是乐队全体放假，抄谱员开夜车抄谱，弄得身心疲惫，苦不

堪言。有一次，我实在忍受不住了，就请在医院工作的同学开了一张病假条，躲过了那次的抄谱任务。为此，屠颁铭还查问了好几次，最终因没有找出破绽而作罢。

在无锡抄谱期间，大家每天的工作都在十三四个小时左右，眼熬红了，手磨出了茧。当最后一页总谱如期完成的时候，所有人都就势往床上一倒，半天没人说一句话。

回到团里，又奋战几天抄齐了分谱，这天乐队终于开排了。乐队的指挥是余杰老师，他是上海音乐学院的高才生，指挥乐团多年，有着丰富的实践经验。这是一个单管制的管弦乐队，弦乐用了十六把小提琴、六把中提琴、六把大提琴和三把低音提琴，我是六把大提琴中的最后一个。

第一天排练，我眼睛看着谱，手根本跟不上。等乐队一休息，别人都去抽烟、喝茶，我就拼命地练自己的声部，中午、晚上更是一个人泡在排练室里。这次没人敢说我是走白专道路了，而一致肯定我是为普及革命样板戏苦练基本功。到春节正式演出时，我对自己演奏的大提琴声部几乎可以背下来了，在技术上也完全胜任了。我觉得一个人的潜力确实是很大的，只要你咬紧牙关，全力地去做，就没有不可能的事情。从我拿到大提琴开始，不过三四个月时间，居然也能坐在管弦乐队中演奏全剧《红色娘子军》了，使我对自己所从事的职业充满了信心。随着时间的推移，我从大提琴声部的最后一把，逐渐地升到声部首席的位置，而且还在1976年的一台歌舞节目中，演出了大提琴独奏《萨丽哈最听毛主席的话》[18]和《映山红》[19]，曾在常州的文艺舞台上引起过小小的轰动。

春节期间，我们在常州市最大的剧场——红星剧院上演了革命现代芭蕾舞剧《红色娘子军》。这是完全按照样板团的要求来演出的一台芭蕾舞剧，其阵容之强大、场面之宏伟开创了常州市文艺舞台之先例，一时成为人们茶余饭后谈论最多的一个话题。俗话说：台上三分钟，台下三年功。此话千真万确，为了这台演出，全团一百多人全力以赴，所吃的苦不是用文字所能描述的。就说舞蹈队的这些女孩子们，练芭蕾功练得脚趾甲脱落，袜子被血沾住脱不下来，疼得直冒冷汗。与她们相比，我开夜车抄谱、没日没夜地练琴就算不得什么了。

1971年，常州市文化局为了发展本市的文艺事业，培养更多的艺术人才，经上级批准，又成立了“常州市文艺学校”，校址设在人民公园内，并招收了几十名新生。这些孩子比我还小，大一些的初中没毕业，小一些的刚小学毕业。因为学校初建还没有教师，所以把大部分的学生放到我们团来代培，我们乐队也分来了好几个学生。从此，乐队的排练室里增添了一群叽叽喳喳的“小喜鹊”。

《红色娘子军》演出结束后，总工会业余管弦乐团中有部分同志就此调入常州市文工团工作，其余的人都陆续地回到了他们各自的工作岗位。乐队只得采取以老手带新手的办法，来培养常州艺校的这批学生。因此，当我自己还是学员的时候，就作为老师，带了第一个大提琴的学生；此外，还负责给这些艺校的同学们讲乐理课，所编写的讲义还在1976年整理出一本完整的《音乐基础理论》，并送去文化局审查，获得好评。其实我比他们大不了二三岁，自己还是个孩子，还

调皮，还好玩，但我给学生们讲课时那种一本正经的神情，至今他们还记忆犹新。

1973年4月，一纸学员结业证书，标志着我在文工团出徒了。父亲为此送给我三件珍贵的礼物：一辆崭新的凤凰牌自行车、一块上海牌手表和家中的一个床位，允许我白天骑车上班，晚上回家居住。从此我成为一名正式的无产阶级文艺战士，每月工资17元，足够维持自己的生活。

是年我十八岁。